

目

本

音

楽

集

団

邦楽現代

第十号 一九八二年春

特集 現代邦楽合奏団の実態を探る

女形が、女を女以上に表現するように、
それは祭り以上の“祭り”だった。

巨火

三木 稔 作品選集 Vol.2

「燃える邦楽器」を現出した、鬼才三木稔と
日本音楽集団の臨界点！

“巨火”の天地を揺がす打楽器群の圧倒的な迫
力、“わ”の愉しいアドリブの競演——最高
の録音が美事に捉えています。



井上道義（指揮）（巨火のみ）
日本音楽集団

●CMT-1041 ¥2,500

[わ]



めばえ／三木 稔 作品選集 Vol.1

香り、色、そして音がたがいに照應し合って、
あの詩行そのままの世界が

野坂恵子（箏・二十絃箏） 宮田耕八朗（尺八） 杉浦弘和（三絃） 日本音楽集団

●CMT-1001 ¥2,500

絶賛発売中



野坂恵子・三木稔／「二十絃箏の世界」

ここには、もはや音楽における境界など存在しない。
遊びぬかれた10曲から紡ぎ出す野坂恵子の二十絃箏の響から、
湧きあがる目もあざやかな色彩をもった境音たち。

昭和54年度芸術祭優秀賞受賞

野坂恵子（二十絃箏） セヴェリーノ・ガッセローニ（フルート）

徳永二男（ヴァイオリン） 伊藤惣一（語り）

山岡重信（指揮） 東京フィルハーモニー交響楽団 群馬交響楽団

●CMT-1015-1018 4枚組 ¥10,000

絶賛発売中



野坂恵子／二十絃箏の世界 Vol.2

パッサ、ブルースそして最近作までの多彩な選曲。

野坂恵子—二十絃箏の深奥を刻明に捉えています。

野坂恵子（二十絃箏） 坂田誠山（尺八）

●CMT-1048 ¥2,500

5月21日発売予定

Camelata

発売元：カメラータ・トウキョウ 販売元：RVC株式会社
〒150 東京都渋谷区神宮前4-26-32 吉田マンション3F TEL.03-405-6081

文取

あやとり

名古屋労音では、創立二十五周年を記念して、この三月、Step up Concert を企画し、地元在住の若手邦楽演奏家（草・谷沢千早、伊藤和子、北川恵美子、尺八・加藤桑山、中沢委成、司会・広岡優山）を中心に出身の加藤洋（三味線）、特別依頼の黒坂昇（打楽器）の応援を得て、しかも、流派・所属を超えての混成グループという、はじめての試みでもあった。

さらに、この会では、地元の作曲家三人に新作を委嘱し、古典の曲をふくめて六曲のプログラム内容。

テーマは、「この土地を愛し、ここに生き、ここ（名古屋）から私たちの音楽をつくらう」と。

委嘱した三人の作曲家（堀山栄治・告井延隆・笠井るみ子）は、いわゆる「邦楽畑」ではなく、フォーク、ニューミュージック・グループの人をふくめて、ほとんどがはじめて邦楽器による作曲を担当したわけだが、それぞれに個性あふれ、相互のシゲキになったようであった。

当夜のコンサート感想文のなかに「若い人が何かをやろうという活気を非常に感じました」といわれるように、邦楽を、たんに習いごととしてでなく、作曲家、演奏家、そして聴き手も、共感できるようなものをめざして取組をした証しとして、多くの教訓を残してくれた。

こうした創造活動が、次のステップに継続する運動となるように、日常の交流を深めながら、鑑賞団体の一員として努力し、早い時期に二回目の実現をめざしたい気持ちになった。制作にあたっての忙しさも、久しぶりに心地よい疲労感として味わえた。

（中 齊 優）

目次

邦楽現代 第十二号 一九八二年 春

文取 中 齊 優

●特集 現代邦楽合奏団の実態を探る

○西日本の合奏団 レポーター 大崎じゅん

東日本の合奏団 レポーター 霜島素子

○全国現代邦楽の合奏団 一覧表

雑談談義 朝倉 撰

及ばずながら 黒川昌満

日本音楽集団一九八一年度前期

定期コンサート・シリーズ・プログラム

64 春の総合定期演奏会

65 定期演奏会 外国人による作品特集その一

66 定期演奏会 語りと音楽特集その四

新しい邦楽を担う人たち 矢崎明子・清水義矩・高橋明邦

一九八〇年度後期現代邦楽の作品と演奏 心に残ったものから

木村重雄・小宮多美江・土田貞夫・富樫康・長尾一雄・上野晃

新典音楽作品研究（新連載）

子供のための組曲 池田逸子 天如 石田一志

ほうげん抄・新刊案内・新譜案内

日本音楽協会通信

日本音楽集団の活動とご案内

近づく第八次海外公演について

ゲヴァント・ハウス・オペと世紀の協演

日本音楽集団原宿教室・第十二回夏のアカデミーのご案内

団員及び団員に関するグループの動向

第六回作曲公募の結果報告

次回（実験作品）アンデパンダンへ参加のおすすめ

団員及び団員等に関する今後の予定

特集 現代邦楽の合奏団の実態を探る

全国に現代邦楽を合奏するグループはどのくらいあり、どのような活動をしているのでしょうか。

私たちの耳に入ってくる情報からすると、かなりの数のグループがありそうだとすることは想像できます。そしてこのようなグループが沢山できることは、現代邦楽が展開してゆく上で、その活況を示す喜ばしい現象と言えるでしょう。

このような状況の中で、一方で個々のグループ活動保持のため、互いの連携や情報交換の必要性が出て来ます。

この特集は、合奏団の実態を知り、互いに連携してゆくための端緒となるべく役割を果たすことを願って組まれたものです。

今回、現代邦楽の合奏団としてレポートしたのは、ほぼ次の項目に当るものです。

1. 五人以上でグループを組み、現代邦楽の合奏を主としたレパートリーとする、現在活動中の合奏団。

2. ここでいう現代邦楽は、一九五〇年代以降のいわゆる「現代邦楽」を指す。

3. 師匠を中心とした社中については、特に現代邦楽を対象とした趣旨を持つ場

合のみ取り上げた。

4. 今回は、プロ、アマチュアの別を問わずレパートリーを行い、プロであるかアマチュアであるかの判断は、そのグループ自身の判断によった。

尚、全国をレポートするにあたり、西日本を、京都在住の日本音楽協会合奏団「鼎」所属の大崎じゅん、東日本を本誌編集部の霜島美子が行いました。二者によるレポートのため、その仕方、内容は個々のやり方をあえて統一せず、二様のままに掲載いたしました。

今回は合奏団のデータと活動状況を知ることだけに終りましたが、皆さんのお

話を聞いたたり、アンケートを配っているうちに地域によるグループのあり方の違いや、個々のグループの個性などの中に、種々の問題を秘めつつ現代邦楽の文化がふつと醸成しつつあるのを、感ぜざるを得ませんでした。次の機会には、その辺の一步進んだ追求ができればと願っています。

最後に、この特集のために協力いただいた多くの皆さま方に心からお礼申し上げます。又、もしここに掲載した他にも合奏団がございましたら、是非、編集部まで一報下さいませよう、お願いいたします。

西日本の合奏団 ↓ 大崎じゅん

□名古屋

名古屋では一九七八年、七九年になるまで現代邦楽のグループはありませんでした。六〇年代の現代邦楽ブームの頃は、東海学生邦楽連盟が中心になり活発な活動を行っていたらしいのですが、その中からグループが誕生する動きにまでは至らなかったそうです。伝統的な邦楽界の

保守的風土の中から新しい試みを実行するのは、難しかったようですが、七八年に学生邦楽の出身者が中心となり影の会を結成、七九年には邦楽グループ「天」、日本音楽協会合奏団のグループ「みずほ」が相繼いで結成されました。「影の会」はアマチュアのグループで現在までに三回の演奏会を行っています。「天」はプ

ロの演奏団体でこれも現在までに三回の演奏会を行ったそうです。「みずほ」はアマチュアグループで、流派を超えて集まることが難しかった名古屋で生まれた画期的なグループと言えるでしょう。「みずほ」はだれでも参加できるグループです。

なお、グループ関係とは違いますが、今年名古屋、東海地区の大学の邦楽関係クラブ・サークルが連絡会議を行い、合同で演奏会などを企画してみようということになったそうです。今後の活動に注目したいものです。

□京都

京都では京都邦楽グループが六八年三月に結成されました。このグループは現在までに十二回の定期演奏会を行っています。結成の中心となったのは、代表の高井宏氏と小山青山氏で、より音楽性の高い現代邦楽の演奏団体を目指し、京都の各社中の若手演奏家たちに声をかけ十四名で発足しました。注目すべきことは、このグループは、京都の古典を中心とする社中と円満な関係を保ちながら発展したグループであることです。結成当時は

いわゆる学生運動の頃で、学生邦楽の中からは社中制度を否定する発言もありました。逆に京都の伝統的社中は保守的傾向が強く、現代邦楽を演奏する団体、しかも社中の枠を超えて集まるという初めての経験からも、さぞかし風当たりが強かったのではと想像するのですが、実際はそれ程のことにはなかったようです。その理由は、代表の富井氏が、京都の邦楽界で知名度が高く信頼されており、伝統上に現代の音楽があるという信念で活動してきたからだということです。だから、

このグループに参加するためには師匠の許しを得ること、なんらかの教授資格をもつことなどが条件になっているそうです。因に、発足当時から会員は富井氏一人とのことです。

七一年二月に京都の学生邦楽経験者が中心となって邦楽集団「いき」が結成されました。その団員には、現在秋田の「邦楽の会・燦」同人の荻森真雄氏がいましたし、現在も団員である日本音楽集団団員の稲田康氏がいます。この「いき」は当時の現代邦楽ブームの落し子とでもいえるべきもので、学生邦楽では満たされなかった結果として結成されたといえるそ

うです。その後ほとんどの団員がプロの演奏家になり、七八年六月の第七回定期演奏会後は、おもだった活動はしていないようです。

□奈良

大学、短大、高校のほとんどに邦楽サークルがあるほどの所にもかかわらず、現代邦楽を演奏する団体といえればこれまでに奈良女子大筆曲部ぐらいのものでしたが、三年前から奈良労音の主催する奈良音楽祭邦楽部門というのが発足しました。これはコンクールの形式をとっています。が、さまざまな枠を超えて一つにあつまる機会と場所を提供しようというものだったそうです。ここで、コンクールに応募した人たちが年一回合同演奏をします。この団体が奈良邦楽合奏団で、今年の四月から奈良音楽祭と名称を変更し、定期的な活動を行う団体として出発するそうです。なお指導は、集団の団員である高橋明邦氏が予定されています。

□大阪

大阪では、六三年秋にすでに現代邦楽を演奏するグループが結成されていました。それはぐるーが「いぶき」で、東京の正派音楽院を卒業して大阪にもどってきた吉岡純子女士によって組織されたグループです。東京で現代邦楽の胎動をまのあたりに見た吉岡女士にとって、大阪はまさに「眠っていた」のでした。当時

の大阪邦楽界は古典的風潮にあり、古典の世界で育った者にとっては、対等な人間関係を求めて他流派の者と行動を共にするなど考えられないことでした。そこで、自分の弟子を育て、弟子とともに新たな活動を進めようとしたのだそうです。「いぶき」は吉岡純子中のグループとして出発する以外になかったわけでした。当時の邦楽の演奏会のはほとんどはお客入り会費で入場料は無料でしたが、有料の演奏会を行う初めての社中だったそうです。マンネリを防ぐために二年に一回の演奏会を開催してきたこのグループも、発足二〇年に向けて新しい出発を目指しているようです。

七二年には、邦楽集団「橋」が結成されました。この「橋」の前に「グループ13」というのがあったのですが、メンバーの練習日などが合わなかったりで自然消滅してしまっただのことです。「橋」は学生邦楽の出身者を中心に「気」ころの知れた者どうし集まったら楽しもう。というところで結成されたそうです。年二回の研究会、年一回の定期演奏会を行っており、関西在住の若手作曲家に委嘱作品を依頼したり、大阪現代音楽工房といった洋楽の演奏家たちと協同で演奏会を企画するなど、その意欲的な活動は後進の者たちを十分魅了するものでした。しかし残念なことに、昨年正式解散に至りました。解散の理由は、男性メンバーが仕事の責任が重くなってなかなか思うよ



京都邦楽クラブ
第12回定期演奏会

うに時間のつづきがなくなったり、実質的な活動ができなくなったからだそうです。

七三年には、大阪邦楽合奏団とグループ「響」が結成されました。大阪邦楽合奏団は今から十一年前、大阪新音の前身である大阪芳音の頃から川向勝祥氏が中心となり、邦楽鑑賞運動を展開した結果として結成されたものです。関西では学校公演などを行うのはかなり困難な状況にあるのですが、十年間の運動の成果として、大阪邦楽合奏団では昨年尼崎で二回の学校公演を行ったそうです。また一般の参加者を募って活動している「六段を弾く会」はこの合奏団を母体としています。今後とも幅広く邦楽の啓蒙運動を進めていくとのことでした。

一方同様に邦楽の啓蒙運動を展開しているのが、グループ「響」です。このグループは大阪の作曲家大嶽和久氏とその門下生によって構成されています。大阪邦楽合奏団が教育機関や邦楽の初歩的興味をもった人を対象に運動を進めているのに対して、「響」は、歌謡曲から民謡、映画音楽、ニューミュージックに至る曲を筆・尺八で演奏するように偏重し、そのようなプログラムで演奏会も主催しています。このポップスを邦楽器で演奏することには、「邦楽器で演奏する必要性がない」とか「邦楽器で演奏する物珍しさが先行している」とか「邦楽に興味があるよ

うです。しかし、大嶽氏の主張は、まだ邦楽、邦楽器に対する世間一般の偏見は拭い去られておらず、世間の既成概念から解き放たなければならなく、邦楽器の演奏会で邦楽関係者以外の層にも訴えることを考える必要があるというものです。「響」がポップスを演奏するのは糸口であって、決して目的ではなく、演奏会により、テーマや方向を思考しながら、古典から現代曲までレパートリーを揃えて活動しているとのことでした。

七八年には日本音楽協会合奏団「鼎」が誕生しました。東京ではすでに、同じ日本音楽協会の「星組合奏団」や「合奏団たあく」が活動していた頃、関西にはアマチュアが自由に参加できる現代邦楽を演奏するグループはありませんでした。第八回日本音楽集団夏期合奏研究会に、西から参加した人たちが中心に結成しました。この合奏団は他の協会合奏団同様、入団制限のない、だれでも参加できるアマチュアの団体です。

八〇年には、関西音楽集団、関西邦楽合奏団、管絃集団「破手組」と相次いで結成されました。関西音楽集団は、日本音楽集団団員の田嶋直士氏が結成したもので、関西で優秀な演奏家を養成する目的で二年間の研究団員によるミニ・コンサートが四回行われました。現在はまた二期生の段階ですが、この研究団員がある一定の水準に達したときに、団員として関西音楽集団を構成するというこ

す。練習は月三回、関西在住の洋楽の指揮者を迎えています。関西邦楽合奏団は月一回指揮者を迎えて合奏練習を行っています。メンバーは校の奏者のみで、現在集団団員の稲田康氏が指揮しています。

八一年二月に、邦楽合奏団「樹」の残党に新しいメンバーが加わり、大阪室内邦楽（仮称）を結成しました。

【兵庫】

兵庫県では、狩谷春樹氏の主宰する新校社に三つのグループがあります。新校社には合奏団があつて、その中で気の合った人たちが最初七五年にグループ「渡」というのを創り、その後刺激された人たちがグループ「未央」、グループ「蒼」を創ったということです。ことに「蒼」は、新校社の古参メンバーが若手グループに影響を受け結成したというもので、「蒼」のメンバーの語り口からは、ほのぼのとした活気が感じられました。

【中国地方】

岡山では七五年に邦楽グループ「魁」、七六年に岡山邦楽合奏団が結成されました。この二つのグループは、年一回の定期演奏会、月一回の研究会を行っており、「魁」はすでに十一回の演奏会を行ったそうです。

広島では七二年に学生、OBを中心にした和楽器集団グループ「樹」が結成され、現在までに十一回の演奏会を行っています。

す。このグループは、自由な行動、を行おうと集まり、和楽器を知らない人たちにアピールしたいと願っているそうです。それから現在、鳥取大OB、島根大OBたちが、松江、米子あたりでグループを結成しようとしています。

【四国地方】

香川県では、七三年に高松邦楽合奏団が結成されました。現代邦楽の合奏団がどちらかと言うと若い世代中心に結成されているのに対し、この合奏団は比較的年配の方々中心に結成されたとのことですが、今年の五月より若手グループも誕生したそうです。古典を修得し、その上で新しい音楽あるいは合奏を研究しようということ。現在団員は九名で、補助団員を含めると合計約二〇名ほど、練習は月一回で指導は清水義矩氏があたっています。他に、香川現代邦楽研究会が七七年に結成され、現在まで四回の演奏会を行っています。詳細は把握できませんでしたが、会長の林氏によると「私たちは、色々な曲、音楽を自由にやりたいし、どんな色にも染まりたくないのです。」ということでした。

徳島県には、徳島邦楽合奏団があります。詳しいことは本誌九号で岡田寛吉氏が報告されています。七二年に若い人たちが学生を中心にグループ「阿波」が結成され、それが発展解消して徳島邦楽合奏団の結成に至るそうです。彼らがどの

ようにして自然消滅の危機を回避しているか、代表の山上氏にたずねたところ、「もう三〇人くらい消滅しました。しかし結成以来男性六人ががんばっています。解決策として、大学のクラブのOB、クラブ員を暖かしています。消滅しなかった大きな要因は清水義矩先生が毎月徳島まで通って下さったからです。」とのことでした。それから逆に「よい解決策があったら教えてください。」とたずねられました。

九州地方

福岡邦楽育成会が六三年に発足し、七〇年一月の第一期卒業演奏会後藤井凡大氏を常任指揮者に迎えて、西日本邦楽

東日本の合奏団 ↓ 霜島素子

東日本の合奏団には、アンケートに答えていただきました。アンケートにお返事をいただけたところ、間に合わなかったグループについては、後にある合奏団の一覧表の方にデータを載せさせていただきます。

尚、紙面のつごう上、アンケートの全文を掲載できませんでしたが、ご了承下さい。

□ アンケートの質問事項
 ① メンバーの年齢、職業などの特色

合奏団が誕生しました。昨年の四月には十周年記念の第十回定期を催し、今年は十二期生を送り出すということです。年一回の定期演奏会ばかりでなく、年間四、五回の演奏会に出演しているようです。七九年には北九州市で九州邦楽合奏団が結成されました。結成以前に、学生邦楽出身者による現代邦楽のグループがあったそうです。九州邦楽合奏団は、楽器店と出版社の主催する講習会を契機に、清水義矩氏の協力のもとで結成されました。練習は月一回、現代邦楽の「運動」と

か、思想などを意識して活動しているわけではなく、多くの人たちに理解してもらえればと思っているそうです。今年の八月に初めての演奏会をするそうです。

② 定期演奏会や、その他の催しなどの活動状況

③ 練習はどういう風にやっているか

④ グループの趣旨や目標など

⑤ 他のグループとの連携などに対する希望

⑥ グループへの入団について

⑦ 主なレパートリー、作品（作曲者）

⑧ 今後の予定

正派合奏団（東京他各地）
 ⑨ 20～60代。

⑩ 26年東京新聞主催邦楽コンクール2位、31年同コンクール1位、文部大臣賞受賞。所属する正派邦楽会の演奏会、唯是齋一氏他の作品発表会、レコーディングなど。

⑪ 底辺をひろくかつ高めてゆくことを目標としている。

⑫ 納得ゆけば行う。

⑬ 年一回定期入団テストを行う。

⑭ 唯是齋一、中島靖子、平井康三郎の作品。

日本音楽集団（東京）

⑮ 演奏家、作曲家、文芸担当、事務局を含み、10代から60代、全員プロ。

⑯ 60数回の定期演奏会の他、各地への地方公演、学校公演、依頼公演、レコード録音、テレビ、ラジオへの出演。過去七次一〇八回の海外公演。雑誌、新聞の発行。音楽教室、合奏研究会などでアマチュアの育成を行う。

⑰ 演奏会、催し物に沿って行う。研究員は週二回定期的練習を行う。

⑱ 伝統楽器で現代に生きる音楽を作ることを目的とし、プロとしての作曲演奏活動のみならず、教育演奏活動・啓蒙活動など、現代邦楽振興のため多岐に亘る。

⑲ 行いたい。日本音楽協会フェスティバル又は種々の機会を通して、全国のグループに呼びかけている。

⑳ プロを目指す人対象に年一回公募。

㉑ 団員の長沢勝俊、三木稔の作品中心

に常時可能なレパートリー約35曲。

㉒ 年6回の定期公演、秋に地方公演、第八次海外公演を行う。

桐嶺会（東京）

㉓ 20～30歳の女性。

㉔ これまでに16回の定期演奏会、ヨーロッパ旅行、レコード録音など。毎年4月に定演。

㉕ 不定期、正派邦楽会館にて。

㉖ プロとして息の長い音楽性豊かなグループでありたい。

㉗ 大いに交流したい。

㉘ 正派音楽院卒業生により結成される。

㉙ デルタ・セツパン（以上松本雅夫）

／カプリチオ（牧野由多可）／飛騨による三つのバラード（長沢勝俊）／ZODIAC（黄道帯）（唯是齋一）

㉚ 今年11月府中市にて公演。

創明合奏団（東京）

㉛ 30～40歳の女性多い。プロの団体である。

㉜ 48年以降毎年定期。

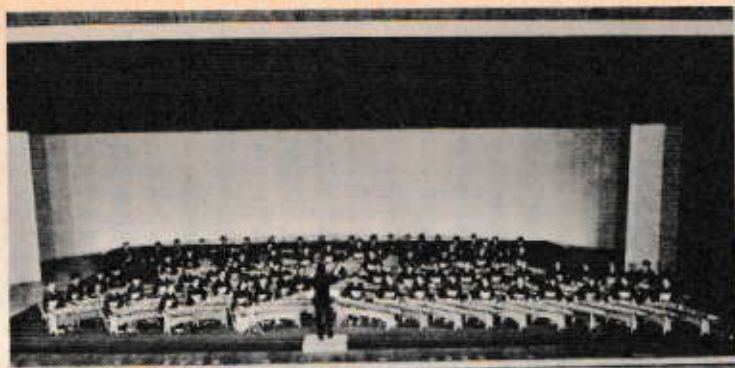
㉝ 毎週金曜日、創明音楽会練習場、小野衛が指導。

㉞ 邦楽器による合奏音楽の発展に尽す。

㉟ 創明音楽会の会員に可。

㊱ 小野衛、安達元彦、石村真礼生、岸屋正邦、小山清茂などの作品。

㊲ 11月26日に「小野衛作品による演奏会」（レコーディングを記念して）



桐風会



創明合奏団

日本音楽協会「星組」合奏団（東京）
 30歳前後の社会人が多い。
 毎年秋に定期演奏会、既に4回行う。
 第1、3回日本音楽協会フェスティバル
 に参加、他。
 毎週土曜日。指揮は稲田康。集団ス
 タジオ。
 いい音楽を作りたい。合奏を楽しみ
 たい。プロに劣らぬ技術をもちたい。長
 く続けてゆきたい。

日本音楽協会の中での連携はあるが
 もっと広げたい。
 人団歓迎、特に打楽器がほしい。
 みち・子供のための組曲・人形風土
 記（以上長沢）／古代舞曲によるパラ
 レーズ・星の祭り（以上三木）
 6月に第4回日本音楽協会フェステ
 イバルに参加。10月に第5回定期演奏会。
 日本音楽協会合奏団「たあく」（東京）

23、30歳。7割が女性。三分の二が
 OL。

第2、3回フェスティバルに参加。
 54年に秋田へ遠征。星組合奏団定期など
 に客演する。

毎週金曜日。集団の田村拓男又は他
 団員による指導を受ける、集団スタジオ。
 邦楽に対する偏見を打破、一人でも
 多くの邦楽ファンを獲得したい。個性
 なグループになりたい。

年2回位の現状報告会、広報誌の発
 行があるとよいと思う。

新規入団大歓迎。

人形風土記よりハニボボ／ハ木うそ、
 二つの田園詩（以上長沢）／新八千代
 子他

本年6月第4回フェスティバル参加。
 秋に定期演奏会。

ぐるーぶ・ただ（東京）
 30代前後、ほとんどが男性。プロの
 演奏家。

3回のコンサート開催。レコード2
 枚発売。
 指導者なし、練習は演奏会の時のみ。
 主に笛、打楽器を中心にした演奏活
 動をしてゆきたい。海外公演ができるよ
 うにしたい。

機会があればしたい。
 受け入れるが、プロの演奏家である
 ことが条件。

風路（長沢）／藤（三木）／調（藤）

合（成敏）／雨の向うがわで（池辺晋一郎）
 他

邦楽合奏団（東京）

20、46歳と幅広く、平均27・2歳。
 男対女は1対2。勤め人、OLが多く主
 婦数名。

54年「邦楽アンサンブル21世紀」と
 ジョイント・コンサート。55年第2回演
 奏会。

月2回、第1・3土曜日。年2回春
 秋に強化合宿。音楽監督清水義矩氏宅。

（翔）の指導もなさっている清水氏につい
 ては24、25ページに紹介させていた
 きました。

アマチュアとして新しい日本音楽の
 アンサンブルを目指すと共に団員相互の
 親睦、団結を図ることを目的としている。
 演奏者、聴衆が共に楽しめることを目的
 として「日本の音楽」の普及、発展に少
 しでも寄与できればと思っている。

音楽は市民社会に根をおろして初めて
 発展できるもので、その意味で私たちの
 ようなアマチュアの合奏団でしかできな
 いことが多くあると思う。それを目ざし、
 求めて活動の輪を広げてゆきたい。

本団はまだ基礎を固めるのに専念す
 べき段階だが、希望は持っている。情報
 交換はしたい。

邦楽器の経験者なら流派など問わず
 歓迎。特に弦楽器奏者を求めている。

② 邦楽器のためのメドレー(北から南へ)
(福島雄次郎)／ディヴェルティメント
(佐藤敏直)／絲竹交響曲第一番(藤井
凡大)／合奏組曲「石狩川」(唯是震一)
／嬉遊曲(中村洋一)

③ 聯合奏団「絹の会」(東京)
④ 20〜30代の女性作曲家。

⑤ 昨年十一月に第一回の定期演奏会を
行う。

⑥ 毎週木曜日、目黒の愛護会研究室。
指導は林紀人。

⑦ 流派にこだわらず、洋楽、邦楽の垣
根を越え、今の日本人の感覚を表現する
身近かで親しみやすい等の音楽作りを目
ざす。

⑧ 互いに連携するまでの余裕はないです。
⑨ 増員したいと思う。団員全員合議で
決める。

⑩ かごめ変奏曲(小山清茂・上野哲生
編曲)／争のための四重奏曲(石野冬樹)
／「華」その三つの顔(服部公一)／夜
の狂想曲(箕作秋吉・上野編曲)

⑪ 今秋十一月十日に朝日生命ホールで
第二回演奏会を行う。

⑫ 20〜30歳の男女同比。会社員。
⑬ 毎年12月の第一週の月曜に一年の成
果を発表する。

⑭ 月一回、指導者福田輝久、琴光宣和
楽器店ホールにて。

あおたん(長野)

① 一層高いレベルに達するよう心がけ
ている。

② いっしょに音楽会をやるのは難しい
が、現状報告などはしたい。

③ 人数は現状でよいが、打楽器がほし
い。

④ 信濃抒情(平井)／子供のための組
曲・人形風土記・飛騨によせる三つのパ
ラード(以上長沢)

⑤ 当初は尺八のレベルをあげる目的で、
筆に入ってもらった。あおたんとは
青年探求、あおびょうたんよりできた。
まだまだ未熟であるが、若さをもって新
しいものにぶつかることによる。

⑥ 邦楽の会(秋田)
⑦ 年齢は21〜42歳、男対女2対5。
⑧ 年に一回の定期演奏会(秋)、これま
でに五回行う。他に県主催の移動公演。
県内中学校回り「中学生のための邦楽コ
ンサート」を年二、三回やっている。

⑨ 毎週木曜日、メンバー宅にて。指導
者はなし。
⑩ 地域に根ざした音楽グループであり
たい。邦楽を多くの人に楽しんでもら
いたい。風土、民話、民謡との対話をは
かりたい。我々のグループの合言葉は「や
りたいことをやる」。この気持ちを続け
たい。

⑪ メンバーのつこう上、そろって遠く
へ旅行するのは不可能ですが、せめて東
北という範囲でいっしょに演奏するとか、

現状報告の場をもつとかしたい。
⑫ 現在は増員を考えていないが、将来
は必要と思う。
⑬ 日本民謡組曲第一番(福島雄次郎)
／飛騨によせる三つのパラード(長沢)
／琉球民謡による組曲(牧野由多可)
⑭ 秋に、「長沢勝俊作品による語りと
音楽の夕べ」を企画中。

⑮ 指導者を集団から派遣してほしい。
⑯ 作品に関する資料がほしい。地方のメン
バーによる対談特集などあるとよい。

日本音楽協会仙台合奏団「遊」(仙台)
⑦ 22歳前後、男女同比、学生が多い。
⑧ 2回の定期演奏会、4月に気軽な発
表会に参加。

⑨ 演奏会のために各曲週一回以上、メ
ンバー宅にて。

⑩ 邦楽器を古典の枠より広げたい。邦
楽器を身近なものにしたい。今後は個人
のレベル・アップを目ざしたい。

⑪ 他のグループと合同で演奏したい。
⑫ 個人的に自習可能な方ならいつでも
歓迎。

⑬ 四季・鳴門秘帖・八郎物語(以上三
木)／二つの舞曲(長沢)
⑭ 今秋、宮城県芸術協会音楽部門に参
加。冬に第3回定期演奏会。
⑮ 我々の手でできる作品が少ないので
こまめている。

⑯ 札幌音楽集団「群」(札幌)
⑰ 30歳代が多く、男14名、女13名、半
数が音楽を職業としている者。
⑱ 定期演奏会を既に10回の他、種々コ
ンサート、地方公演、海外公演を行う。
⑲ 週一回、佐藤宅にて。
⑳ 単なるお稽古事の域を脱し、「人類
のための音楽」を目ざして努力している。
㉑ 希望あり、他グループから人材派遣
を希望している。

㉒ オーディションを行う。
㉓ 三つのレリーフ(松本雅夫)／形象
(助川敏弥)／三面の争のための音楽(岡
宮芳生)／風紋(柳田孝義)／春に寄せ
て(川越守)
㉔ 6月に西独へ演奏旅行、8月にサマ
ー・コンサート。

「全国・現代邦楽の合奏団一覧表」(次ページ)についての注意事項
1. それぞれの地域の中はグループ設立順に並べた。
2. 楽器と人数の表示は、アンケートの回答の表現をもととした。

全国現代邦楽の合奏団 一覧表

地域	名 称	代表者	連 絡 先 住 所	電 話	結成年	楽器とメンバー数
北海道	札幌新音楽集団 「群」	佐藤同登	札幌市中央区南四条13丁目 (〒064)	011-561-5735	1970	尺八3・三味線1・箏(十三絃・二十絃・十七絃)12・作曲3他に洋楽器など7
秋田	邦楽の会「ほ」	野口裕子	秋田市保戸野原の町1-13(〒010)	0188-24-1555	1974	箏5・尺八2
宮城	日本音楽協会 仙台合奏団「海」	山本昌子	仙台市錦町2-3-20 (〒980)	0222-62-9140	1979	笛(フルート)2・尺八2・三絃3・箏(十三絃・二十絃・十七絃)7・打楽器3・指揮1
長野	あおたん	太田雅之	長野県南安曇郡三郷村大字温3035-11(〒399-81)	026377-2579	1977	尺八9・箏11
東京	正派合奏団	中島靖子	新宿区市ヶ谷左内町3 正派邦楽会館内 (〒162)	03-260-6806	1949	箏・三絃・十七絃・総数約百名(地方団員4グループ各約30名)
	日本音楽集団	長沢勝俊	渋谷区神宮前6-16-14 小早川ビル (〒150)	03-409-5374	1964	笛3・尺八10・三味線3・びわ4・箏(十三絃・二十絃・十七絃)23・胡弓3・打楽器7・指揮2・作曲4・文芸3
	桐謡会	山本喜代志	新宿区市ヶ谷左内町3 正派邦楽会館内 (〒162)	03-260-6806	1965	不定
	創明合奏団	小野 衛	大田区北嶺町14-20 創明音楽会 (〒145)	03-728-5925	1967	尺八1・三絃6・十七絃5・箏1・胡弓2(重複あり)
	宮城合奏団	宮城喜代子	新宿区中町35 宮城事務所(〒162)	03-260-0048	1972	箏・三絃・十七絃 計約20名
	日本音楽協会 皇組合奏団	石井俊幸	国立市谷保5896 (〒186)	0425-75-6668 (経・日本音楽集団) 03-409-5374	1976	笛と尺八6・三絃3・琵琶1・箏(十三絃・二十絃・十七絃)8
	日本音楽協会 合奏団たあく	秋本輝夫	所沢市大字所沢字並木521-2-806 (〒359)	0429-25-0823	1978	笛2・尺八4・三絃2・箏12・十七絃2
	ぐるーぷ「だだ」	なし	渋谷区神宮前6-16-14 小早川ビル 日本音楽集団気付	03-409-5374	1978	打楽器5・笛2
	邦楽合奏団「翔」	尾方利至	横浜西区老松町29-8 野毛山住宅431 後藤善宏 (〒220)	045-242-4047	1978	篠笛1・尺八9・三絃1・箏・十七絃19
	邦楽アンサンブル 21世紀	大友竹郎	所沢市北野199-74 (〒359)	0429-43-2931	1978	尺八2・箏・三絃5・十七絃
	華合奏団「橘の会」	中野公子	練馬区南田中4-16-11 ゼール音楽事務所 (〒177)	03-995-5221	1980	箏11
	邦楽合奏団 「あうん」	なし	渋谷区神宮前3-6-14 清水義矩方 (〒150)	03-402-0709	1981	尺八1・三絃1・箏4
名古屋	影の会	吉田 力	名古屋市北区尾上町1-2 尾上団地7-408 (〒462)	052-981-8266	1978	尺八4・箏3・三絃2
	邦楽グループ「天」	加藤桑山	名古屋市千種区城山町3-33 (〒464)	052-951-7960	1979	尺八4・箏3
	日本音楽協会 グループ「みずほ」 (連絡先)	水野正徳	春日井市北知多2-144 (〒486)	0568-31-2775	1979	尺八・箏 計15名
京都	京都邦楽グループ	富井 宏	京都市右京区西院高山寺町11 (〒615)	075-311-2308	1968	尺八・箏・十七絃 20名
	邦楽集団「いき」	島田重弘	京都市伏見区榎木町1136-1 (〒612)	075-642-7874	1971	尺八・箏・十七絃・三絃・作曲・指揮 計5名
奈良	奈良音楽集団	小林健一郎	奈良市西大寺国見町1-1-213 奈良労音 (〒631)	0742-26-1414	1981	箏14・尺八1
大阪	ぐるーぷ「いぶき」	吉岡純子	奈良県生駒市3-207-330 (〒630-02)	07437-4-1189	1963	箏・三絃・十七絃・二十絃 計25-30名
	大阪邦楽合奏団	川向勝洋	大阪市城東区野江1-13-1112 (〒536)	06-932-2785	1973	みさと笛・尺八・びわ・箏・十七絃・打楽器 計20名
	グループ響	大塚和久	東大阪市菱屋西183 (〒577)	06-781-1869	1973	箏14名
	グループ花	吉村美智子	大阪府箕面市箕面2-9-10 (〒562)	0727-22-3615	1975	箏・三絃 計7
	日本音楽協会 合奏団「燕」	北原清夫	京都市中京区河原町二条下ル東入 ルーノ船入町 広誠院内 (〒604)	075-241-0511	1978	笛・尺八・箏(十三絃・二十絃・十七絃)・三絃・びわ・胡弓・打楽器 計27名

地域	名 称	代表者	通 絡 先 住 所	電 話	結成年	楽器とメンバー数
大阪	関西音楽集団	田嶋直士	堺市大東野91-8 (〒588)	0722-36-2423	1980	笛・尺八・びわ・華・十七絃 計22名
	関西邦楽合奏団	尾崎宗昌	豊中市柴原町5-5-27 (〒562)	06-853-4279	1980	華・十七絃・三絃 計20名
	管絃集団 破手組	宮原幸夫	大阪市阿倍野区西田辺1-7-10 (〒545)	06-69-1087	1980	尺八2・華と十七絃と三絃8名・スタッフ3名
	グループ「コビス」	中村洋一	大阪府豊中市千里園1-4-16 (〒560)	06-843-01436	1980	華・尺八
	大阪室内邦楽	本多正信	大阪府守口市浜町1-5-8(〒570)	06-991-2028	1981	笛・尺八・びわ・華・十七絃・三絃・打楽器
兵庫	グループ「波」	なし	尾崎市塚口町3-27-8 新絃社 (〒661)	06-422-5131	1975	尺八・華・十七絃・三絃 計5名
	グループ「未矢」	なし	上に同じ	上に同じ	1979	上に同じ
	グループ「蒼」	なし	上に同じ	上に同じ	1979	上に同じ
岡山	邦楽グループ「魁」	橋本石基	岡山市あけぼの町32-7 西谷方 (〒702)	0862-62-4047	1975	尺八・三絃・華3 マネージャー
	岡山邦楽合奏団	西谷信吾	岡山市あけぼの町32-7 (〒702)	0862-62-4047	1976	尺八5・三絃2・華と十七絃7・打楽器2
広島	和楽器集団・グループ「樹」	森岡幸雄	広島県呉市焼山町第三団地51-7 (〒737)	0823-33-5996	1972	尺八4・三絃1・華5・打楽器1
香川	高松邦楽合奏団	木村岳宇山	香川県大川郡大内町川東393 (〒769-26)	08792-4-2327	1973	華・尺八9(補含めて約20)
	香川現代邦楽研究会	林宋範山	香川県高松市多賀町2-19-14 (〒760)	0878-31-5671	1977	笛・尺八・華・十七絃・三絃・びわ・胡弓・打楽器 計25名
徳島	徳島邦楽合奏団	山上具視	徳島県名西郡石井町内谷261 (〒779-32)	0886-42-1637	1974	笛・尺八・華・十七絃・三絃・打楽器
福岡	西日本邦楽合奏団	福島伸子	福岡市中央区春吉2-16-27(〒810)	092-741-2758	1970	尺八・三絃・華・十七絃 計21
	九州邦楽合奏団	庄司 貢	北九州市小倉北区宇佐町2-3-3 永和ビル404 (〒802)	093-522-5271	1979	尺八6・華14

全国有名デパート
楽器店にて
お求め下さい



あすか琴台
(高低両用)

本鹿皮口前・尾布
(セット)

胴掛ゴム

琴の座

胴の座





琴の座/実用新案登録第968205号

胴の座/実用新案登録第968204号

あすか琴台/実用新案登録第143861号

新作品

万葉箏

新発売

大好評!!

奏者の手により

調弦が自由自在



3つの特長

■二段式竜角

低音部一の絃～四の絃迄の竜角を下げ絃の長さを長くすることにより余韻の良い低音とする。

■特許申請中糸締機

前機のネジを二重にし、さらに内部に金属板をはめ込み、ゆるみをなくした上、余韻を良くするという二重効果。

■良質の材料

竜角はすべて紅木材を使用、あくまで音色の良さを、ねらう。甲良は会津桐を使用。

発売元

株式会社

村松屋

東京都世田谷区上馬 2-32-10 電話 03-411-2006
富山営業所 電話 0766-25-6330

雑楽談義

朝倉 摂

私の育った下谷の家は門の前が墓地で、日暮里駅の上からは4本煙とつが、3本に見える場所、ややひくいところに駅があって、そこから上野を発って、東北地方に向けて出発する汽車や、雪をのせた汽車が上野にかえってくるのがよくみえた。交差する線路の上を出入する汽車の音は、あるときは音楽のように、美しいメロディーをもってきこえた。

どんな音でも、聞く人によっていろいろな感じをもつものだと思う。

一人の人間が生れて育った土地というものは、おそらくその人にとって一生離れられないものなのだろうか。

地方で生れた人は、たぶん小川のせせらぎや、山の空気をすってそうした音のないものから、音を感じるものが出来るのかもしれないが、私のように都会に育ったものには、とうてい思うことすら出来ない静寂さなのだろう。

そうした雑音のなかから音をとらえてきたものには、電車や自動車の音が、いつしか子守唄のようになっているのかもしれない。

そうした雑音の音のなかで、ひととき私に三味線の音は美しいなあと感じた時間があつた。

父の家の隣りに山田抄太郎先生が住まわれてから、連日のように美しい三味線の音が聞えてきた。

山田先生が引越してこられたのは、私が父の家から独立して生活を始めてから間のないことだった。

幼いときから長唄を習わされていた私は、その頃同時におけいこしていたピアノの方が好きだったが、たまに父の家を訪れると隣りから聞えてくる三味線の音に、うっとりしてよく玄関に立って聞いていたことを覚えている。

あれから随分時がたったが、あの時から私の三味線に対する考えはすこし変わったようだ。ビートルズやロックにこったり、あるときはクラシックの音楽会にも随分通った。

仕事をしているバックミュージックとして、キース・ジャレットのピアノ、ぐっとくだけで、クレーダーマンの甘いピアノと管絃楽もけして悪いものではないように思う。

音楽に対して、何ともポリシーのない、だらしな感じで、悪いと思うが、それが専門家でないので、半分は自分で仕方ないと思っているのだろう。音楽に対する反省がまったくくない。

だが、私のもっともなじみのうすいものに現代邦楽がある。というのは、三味線という打楽器をつかって、古典のリズムにあるものを新しく別のところからくみたてようとしても大変に無理なもので

のように思う。

たとえば一七六八年天明和五年に出来たといわれる「教草吉原雀」など、私が今きくと大変にシニールリアリズムのテンポで全曲仕上っていると思う。本調子から二上りになってまた本調子にもどり、そして三下りになって鼓唄があったり、二上りになって三下りに終っているが、これなど、確かに情緒的でありながら、劇画をみているようなリズム感があって、大変に素晴らしい曲だとも思っている。その反対に「高尾さんげ」など、全体を通じて三下りで終る、いかにも古典的な感じの曲だが、墨絵のような淡いイメージでこれも私の好きな曲である。

そうした古典のものには興味があっても、どうも現代邦楽というものは、もっと考えなければならぬものが、基本的にはあるように思う。

つまり三味線が何十本並んでいても私には個人プレイであって、いわゆる洋楽器の合奏とは、基本的に異なるものだと思っているので、その問題が私のなかで、新しく考えが変らないかぎり、観念として、どうしても合奏にきこえてこないのだ。したがって、邦楽器のアンサンブルは大変にむづかしいもので、まだまだ考えるスペースがあるように思う。

あるいは現代邦楽のなかに素晴らしい曲があるの



かもしれないが、ほとんど私が聞く機会がないので、自分勝手な事ばかり述べたようだ。

その点三味線を使用したものより、私は鼓や太鼓を使って現代人のリズムに合せたものの方に面

及ばずながら

物心つくかつかぬ頃から、姉の影響で、クラシ

ックのSPを手捲き音器で聴かされ、長じて高校の頃にはイタオベに魅せられ、ついには趣味を仕事に選んで幾年月、この道に進んでやっぱり良かったという思いと、多少の後悔の念——趣味は趣味としてとっておくべきもので、それが仕事とな

ると雑念が入り込んで純粋に楽しめません——を禁じ得ない、というのが私の最近の心境です。同窓生は概ね銀行か保険か商社かという一般大学の経済学部を出たのですが、レコード会社の企画担当としてはむしろこういうレコード・ファンのな

れの果ての方がいいんじゃないかと、ヘンに自負したりもしています。ご専門の先生方からはそんな短絡的なもんじゃないだろうとお叱りをうけるかも知れませんが、大衆の求めるものを感じとるには大衆の仲間の「なれの果て」の方が好都合だ

と思います。いずれにせよレコード会社は、基本的に大衆を相手にしないと成り立っていきかないのです。勿論、すべて商売々々、売りにくいものは金輪際……なんてアタマで仕事をしてきたつも

白いと思うものがある。

たとえば洋楽器のドラムスと笛や、鼓のコントラストでいいなあと考えた曲を、今すぐには思いださないが、いつかどこかでできたことがあるよ

りはありませんが。

邦楽といえば、かつては父の嗜んでいた清元とか、高校時代の悪友と年



に一回奮発して、芸妓さんの三味の音で酒を飲み交わすなどという時ぐらいしか縁がありませんでしたが、十年程前、「響」——和楽器による現代日本の音楽、なるLP4枚組のレコードを芸術祭参加作品として出させていた機会を与えられ、以来、箏や尺八の音色に日本人としての心を運まきながら呼び覚まされ、及ばずながら、もっともっと多くの同胞に明治、大正の昔から洋楽偏重の波に押されて特殊ジャンル（少なくともレコード会社のカタログでは）にまで追いやられた邦楽音楽の良さを知らしむべし、と思ひ込むようになりました。仕事柄よく海外に出かけますが、自分の国の音楽が、楽器が特殊ジャンルなどというのは日本だけですね。

ところで、会社での私の担当はクラシック、つまり洋楽グループに属すわけです。レコード会社

うに思う。

これからはどしどし素晴らしい曲を邦楽器を主体に作って欲しいと思う。

大いに期待している次第です。（舞台美術家）

黒川昌満

で邦楽という学芸部とか教養部というのが通り相場として、それらを差し置いて手がけるとなると当然のことながら制作の意義というものを強く問われます。当初から私の基本方針は多少なりとも大衆指向、でした。どんなに会心作でも五百枚では涙が出ます。そういうことで「響」のあとはナレーション入りの入門レコード「日本の楽器」を「集団」のご協力をいただき制作、続いて長沢先生の作品をシリーズ化、「人形風土記／子供のための組曲」をはじめこのシリーズは既に四枚を数えることができました。その他、伝統邦楽の代表的なもの、例えば琴古流の「尺八名曲集」とか箏の「六段／八段」等々です。

現実——まだまだ私自身の、ひいてはレコード会社の力不足を痛感しています。少なくともこれまでは、邦楽器のレコードというとお店やお客様に訴える前に、まずかなり熱を入れて社内プロモート／から始めねばならないのです。世間一般の洋楽偏重は当然のように会社内にも果っついていたのです。

しかし、ここに来て着実に新しい波が、それも急速に押し寄せています。既成觀念にこだわらない若者たちが、特にここ四、五年、感じる音楽はとにかく感じるんだ、という考えを持ってきたことです。その演奏が洋楽器であろうが邦楽器であろうが、ましてやシンセサイザーであろうが関係ないのです。レコード会社におりますとそういうことをかなり詳しくデータの裏付け（レコードの売り上げ枚数）をもって知ることができます。こ

とさらに邦楽だ、洋楽だと区分けすることが無意味な時代が確実にやって来つつあるように思います。

邦楽器による優れた作品が、今こそ何のこだわりもなく大衆の心に浸透していける世の中に、少なくともそういう素地ができてきたといえるのではないのでしょうか。

大衆性という点からすれば、伝統邦楽はいかにも作品的に駒不足です。ひとえに大衆性のある、

いいかえるなら現代人の心に強く響きかける現代邦楽——私にはこの呼び名がどうにも馴染めませんが——作品の、一層の賑わいを期待してやみません。

本稿の御依頼があった時、レコード会社の立場から現代邦楽界に提言を、などと気張ってみたのですが、そういう自分の行なってきたことがあまりにも微力だったためとても筆が進まず、こんなとりとめもない駄文となりました。乞御寛容。

（RVC株式会社RCレコード洋楽部次長）

琴造り

くらもち

十三絃
十七絃
二十絃

龍勝

いとしめも致します

千葉県柏市豊住五ノ二ノ二十二

電話〇四七一・六三三・八六四

和楽器専門店

御琴 三絃 尺八 並びに 附属品

諸先生作曲練習本取揃 別註楽器製作承ります
クレジット販売も致しております

老舗

金善

かな ぜん

京・東山区大和田大路四条下ル二丁目

TEL (〇七五) 五六一・二九四〇・五四一・〇三九

近づく第八次海外公演!! ゲヴァントハウス・オケと世紀の協演!!

【二百年祭に急の曲】世界初演

今秋十一月八日に日本を出発する日本

音楽集団第八次海外公演メンバー十八名の第一目標はライブ・チャッピ。前回（七八年）鉄骨が立ち上っていたゲヴァントハウスの白亜の新ホールが待っている。三木絵が前回訪問時に委嘱され、現在作曲中の大作「急の曲」を、日本音楽集団と三管編成のゲヴァントハウス・オーケストラがその新ホールで世界初演するのだ。それは、この世界最古のオーケストラの二百年記念委嘱。二十年でも大変なのに、これはまさに世紀のできごととなる。指揮はクルト・マズア博士。十一月十二日と十三日、この覚え易い日々が初演の日。

集団は他にライブ・チャッピ、ベルリン、シュヴェット、ノイブランデンブルグ等で単独公演を行い、十一月十八日にイタリアに向う。

【十二日間に十三都市から熱烈に求められているイタリア】

集団にとって初めてのイタリアの旅は、ローマに始まり、ナポリ、フィレンツェ、ヴェネチア、トリノ、ジェノヴァといった全ての大都市、それにシシリア島パレルモと全土から迎えられ、終着地はミラノである。それもとやうやらスカラ座で演

奏をするらしい。他の都市も全て第一級の劇場だという。

迎え入れのA.T.E.L.というイタリア最高の組織が、昨春日本にマーケティングに來て、音楽・演劇を通して集団を第一位にランクしたものだから、引き受け地が多すぎ、現在まだ十三ヶ所が折合いがつかぬ状態。嗚呼、古蹟の国の観光に割く時間は、それこそ奇蹟でも待つほかあるまい。十二月一日、ミラノから第に乗ってイギリスに飛ぶ。

【ロンドンの江戸展に参加】

十二月二日、七八年に継ぎ一度目のロンドン公演。今年の秋は、大々的に江戸展が行われるので、未曾有のホール難のロンドンであったが参加が決定。一回目の客のあの感動的拍手を思い、また一昨年の「あだ」成功のあとだけに、東京とロンドンの音楽的連帯に、集団が更に拍車をかける役を担わねばと意気盛ん。

【オランダも政府肩入れて準備中】

ロンドンのあと、オランダにも熱烈なファンがいて、公的補助金もつくなど準備中だが、前記三ヶ国の詳細も含め、乞次号。

一九八〇年度第六回関西定期演奏会と神戸公演の記録

第六回関西定期演奏会

日時 第一夜 一九八一年二月十一日（水）

第二夜 二月十二日（木） 両日とも六時半

開演 会場 京都府立文化芸術会館

【第一夜】アンサンブルの妙味をお聞かせするソリストの夕べ

曲目と演奏者

一、二つの田園詩 長沢勝俊作曲

尺八ノ宮田誠山 等ノ砂崎知子

二、キビタキの森 宮田耕八朗作曲

尺八ノ宮田 等ノ砂崎

三、冬の一日・パート2 長沢作曲

尺八ノ宮田 尺八ノ坂田 三味線ノ宮田

司郎 琵琶ノ半田淳子

十七絃ノ宮本 二十絃ノ吉村七重

打楽器ノ田村拓男

四、三つのフェスタル・バラッド

三木絵作曲・野坂恵子編曲

二十絃ノ野坂・砂崎・吉村

十七絃ノ宮本

五、三木作曲

尺八ノ宮田 三味線ノ宮田 琵琶ノ半

田 二十絃ノ野坂 十七絃ノ宮本

打楽器ノ田村

【第二夜】アマチュアのレパートリーをゆ

きといた演奏をお聞かせする夕べ

演奏者 笛ノ藤崎重康ノ尺八ノ宮田耕八朗・

坂田誠山・田嶋貞士ノ三味線ノ宮田司郎ノ琵琶ノ半田淳子ノ等ノ十七絃ノ白根きぬ子ノ宮

本幸子・野坂恵子・砂崎知子・吉村七重ノ打

楽器ノ堅田啓輝・高橋明邦ノ指揮と打楽器

田村拓男ノ指揮・稲田康

曲目

一、風と光の唄・夏の朝ふれ・雨あがり

内田とも子作曲

二、琵琶小曲集第2より 作曲と演奏 半田

三、コトの本八初音集より 三木・野坂共

作 事独奏ノ野坂

四、小組曲——星の祭り・月の出・なぎさと

太福 三木作曲

五、京の春・宴・虹の輪 長沢作曲

六、等と尺八「美しい練習曲集」より 長

沢作曲 尺八ノ宮田 等ノ宮本

七、阿波の狸囃子 三木作曲

八、大狸鼓ノ堅田啓輝ほか

八、松よ 三木作曲

神戸公演

日時・会場 一九八一年二月十三日（金）

六時半開演 神戸文化ホール（中）

主催 神戸市・神戸文化ホール

演奏者（稲田康を除く京都公演第二夜の参

加者に次のメンバーが加わる）笛ノ西川浩平

ノ尺八ノ三橋貴風・福田輝久ノ太極三味線

花房はるえノ琵琶ノ田原順子ノ胡弓ノ畦地慶

司ノ等ノ十七絃ノ宮本幸子・内藤洋子

曲目

一、開春 長沢勝俊作曲

尺八ノ宮田耕八朗 等ノ白根きぬ子

二、ファンタスマゴリア 長沢作曲

三、鳴門秘帖——ダンス・コンセルタント

三木絵作曲

四、華やき 三木作曲 二十絃ノ野坂

五、巨火 三木作曲

日本音楽集団原宿教室始まる!!

笛・尺八・三味線・琵琶・胡弓・箏・二十絃箏・十七絃・鼓 など
すべての楽器を網羅

豊富なコンサートの中で世界的に愛蔵者を獲得したユニークな曲の数々を、同じ数多い体験から生きた音楽を知る集団団員が直接指導する教室が遂に始まりました。各楽器の各講座とも初めて楽器を手にする方でも「手ほどき」から初、中級へとステップアップするように配慮されています。

入会・どなたでも会員になれ、入会は随時です。

・入会金 五〇〇〇円。(但し、未就学児は不要です。)

- ・会員の資格有効期間は入会より2年間で、期限が切れたときは再入会となります。

受講料・「おやこ教室」を除いてすべて六〇〇〇円(月額)です。(教材費別)

・「おやこ教室」の受講料はひと組（親とお子様各一名）二一〇〇円（月額）で、一名ふえる毎に五〇〇〇円追加されます。

・受講料は三カ月前納とし、納入後の受講料は原則としてお返ししません。



	月	火	水	木	金	土
1:30			華			おや二 教室
3:00						
3:30						
5:00		麗	二十軒	胡弓	十七弦	三味線
6:00						
7:00						
8:30	琵琶	華	尺八	鼓		

日本音楽集団・日本音楽サービス 東京都渋谷区神宮前6-16-14小早川ビル(〒150) 電話03-409-5374

第十二回日本音楽集団「夏のアカデミー」

熱き要望に応え、あらたに岡山、そして軽井沢

毎年、夏の軽井沢で全国、海外の邦楽愛好家に親しまれていた「夏期合奏研究会」は十一回目を迎え、気分も新たに名称を「夏のアカデミー」と改めました。そして今年からは、西の部を新設し岡山厚生年金休養センターで、東の部は従来通り北軽井沢ミュージックホールで行います。

過去十回の経験から生れた講習生のことを考えて作られたカリキュラムと、あなたの疑問に何でもお答えする講師があなたをお待ちしています。

【東の部】

○期 間 八月七日(金)～十日(月)

○会場 北軽井沢ミュージックホール

○募集人員 二二〇名

○會費 三二〇〇円（一日三食、三泊四

日分、団体割引、友の会割引有

○募集樂器 笛、尺八、三味線、琵琶、箏、二十絃

曲（以上東西共通）、胡弓（東のみ）。

教室と曲目例

○初級教室（大編成）——沖繩の風／長沢勝俊、星の

田とも子 ○中・上級教室（大編成）——冬の一日

タイムメント／佐藤敏直（以上東西共通）、ダンス・

／三木（西のみ）

弊社、名鉄観光サービス(株)は、日本音楽集団の米国ハワイ、東南アジア演奏旅行の取扱いをさせていただきました。

海外旅行の際には、弊社オリジナル特選旅行パノラマツアーをはじめ各種パッケージツアーを取扱っています。

皆様の楽しい海外旅行を演出する名鉄観光サービス(株)を御利用下さいませ。

資料のご請求は…



名鉄観光サービス

運輸大臣登録第55号

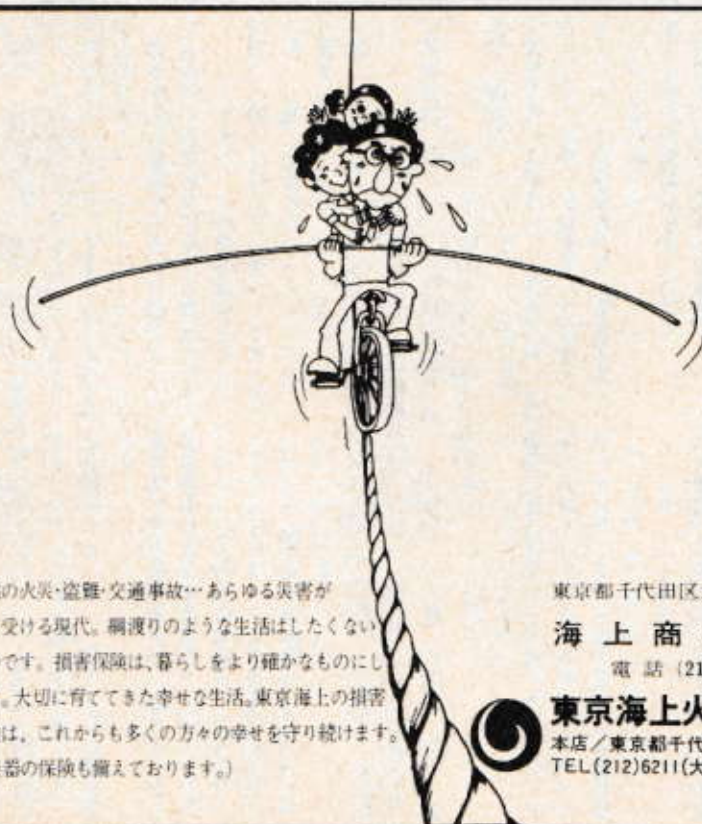
〒105 東京都港区虎ノ門1-2-8

虎の門旅行センター TEL: 03(503)4151

(一般旅行業務取扱主任者 畑 幸男)

担当: 森 皓 昭

正 角 伸 市



あなたの楽器も
危険にさらされています。
火事・破損・盗難にそなえ
保険をかけましょう。

突然の火災・盗難・交通事故…あらゆる災害が
待ち受ける現代。綱渡りのような生活はしたくない
ものです。損害保険は、暮らしをより確かなものにし
ます。大切に育ててきた幸せな生活。東京海上の損害
保険は、これから多くの方々の幸せを守り続けます。
(楽器の保険も備えております。)

東京都千代田区丸の内1-2-1

海上商事株式会社

電話 (212) 0866 代表

東京海上火災保険株式会社

本店/東京都千代田区丸の内1-2-1

TEL (212) 6211 (大代表)

お琴・三味線

品質の優秀さ
価格の安さに定評がある
琴栄楽器店



弊店二階展示場

〈お 琴〉・常時在庫200面 ・試弾できます。
・特別注文仕上げ受承ります。

〈三味線〉・在庫多数 ・試弾できます。

お琴・三味線のお買求めは琴栄ローンで(最高20回払い)

琴

御琴・三味線専門

琴栄楽器店

〒500 岐阜市司町九(大学病院前)
TEL (0582) 63 1826・64 1261

パンフレット無料送付致します

64 春の総合定期演奏会

Regular concert: Works for solo, small ensemble and large ensemble.

五月八日(金) 午後七時開演
都市センターホール

一、鹿の遠音——八本の尺八による

宮田耕八朗編曲

〔尺八〕宮田耕八朗・坂田誠山・三橋貴風・福田輝久・藤崎重康・竹井誠・米澤浩・水谷雅康

二、纏(初演)

新実徳英作曲 一九八一年日本音楽集団作曲賞受賞作

〔笛〕藤崎重康・西川浩平 〔尺八〕I 宮田耕八朗・II 福田輝久
〔三味線〕養田司郎

〔箏〕I 吉村七重 II 内藤洋子 III 滝田美智子 〔十七絃〕木村玲子
〔打楽器〕尾崎太一・安倍久恵

〔指揮〕田村拓男

三、二十絃等調魂協奏曲(初演)

三木稔作曲

〔独奏二十絃等〕野坂恵子
〔笛〕藤崎重康・西川浩平 〔尺八〕I 坂田誠山 II 竹井誠 III 三橋貴風
IV 福田輝久 V 水谷雅康 VI 米澤浩

〔琵琶〕半田淳子 〔太極三味線〕花房はるえ 〔胡弓〕畦地慶司
〔二十絃等〕吉村七重・内藤洋子 〔十七絃〕木村玲子・滝田美智子

〔小鼓〕藤倉成敏 〔大鼓〕尾崎太一 〔棄太鼓〕黒坂昇

〔指揮及び締太鼓〕田村拓男

鹿の遠音——八本の尺八による

尺八の古典本曲の中で、この八鹿の遠音は、八鹿の果籠りとは、男女、親子の愛情を謳っているということで異色ですが、尺八が擬音効果を出すなどして現代ではむしろわかりやすい内容を持っているとして好んで演奏されている二曲です。宮田の持つ最高の技巧と音楽性を駆使し、個の演奏を追求した八鹿の果籠り。これに対しこの八本の尺八による八鹿の遠音は、宮田が元の二管という形で二演奏者が互いに技巧を競う傾向にあるのを嫌って、八本の尺八という「群」に返すことに

四、Metaphor (改訂初演)

柴田南雄作曲

独奏群——〔笛〕藤崎重康 〔尺八〕三橋貴風 〔三味線・胡弓〕坂井敏子
〔琵琶〕半田淳子 〔二十絃等〕吉村七重 〔箏〕花房はるえ
合奏群——〔笛〕西川浩平 〔尺八〕竹井誠・米澤浩

〔三味線〕太田幸子・加藤洋 〔三味線・胡弓〕坂井敏子
〔箏〕熊沢栄利子 〔十七絃〕木村玲子

〔打楽器〕藤倉成敏・黒坂昇

〔指揮〕田村拓男

五、ディヴェルティメント

佐藤敏直作曲

〔笛〕藤崎重康・西川浩平
〔尺八〕I 宮田耕八朗・三橋貴風・水谷雅康 II 福田輝久・竹井誠・米澤浩
〔箏〕I 野坂恵子・花房はるえ・佐藤里美・大島菜穂子 II 吉村七重・木村玲子・熊沢栄利子・小林恵美子 〔十七絃〕内藤洋子・滝田美智子・松本和美

〔打楽器〕尾崎太一・黒坂昇・石崎信宏

〔指揮〕田村拓男

より、本当の愛の讃歌を取り戻そうという意図で書かれています。

古典本曲という背景を持った二管の緊迫した演奏と異なり、音型はわかりやすいエッセンスを取り出して八管が吹きあうよう編曲されています。

〔編曲〕一九七九年 □初演 同年第五十回定期 □演奏時間 約7分 □編成 尺八8本

纏

〔纏〕というタイトルは各パート、各群が絡み合い、纏りつく様をイメージした

ときに浮かんだものです。同じ意味を仏語に置き換え、**ENLACAGE I**——合唱と管弦楽の為に、**77**——、**ENLACAGE II**——三人の打楽器奏者の為に、**78**——、**ENLACAGE III**——二台のトリッパと打楽器の為に、**80**——と続く私の作品群の源流がこの曲にあるわけです。

この初演のために若干の改訂を行いました。五年前の未熟さは隠すべくもなく、又、それで良いのだと考えています。当時の想念をたとえ冷汗を流しながらも確認できるのは私にとって大きな喜びでありますし、必ずや今後の糧となるものであります。

最後に、この場をお借りして初演にあたられる日本音楽集団の方々に心から御礼申し上げます。

【作曲年】一九七六年 【初演】八一年第六十四回定期 【演奏時間】約17分
【編成】笛2・尺八2・細絃三味線・箏3・十七絃・打楽器2

(新実徳英)

二十絃等鎮魂協奏曲

日本音楽集団創立の前年、合唱と管弦楽のために、「彼岸への対話」といった内容で**ヘレクイエム**を書きました。天寿を全うしないで逝った魂への哀悼を込めた五楽章の曲でした。この二十絃等鎮魂協奏曲は単一楽章だし、歌詞もありませんが、私の二つ目の**ヘレクイエム**となるわけです。

西欧に *Concert of Requiem* というタイトルがあるかどうか知りません。私にとって音楽は行きつくところ宗教であるという考えが昔からありました。従って、自分が長年親しみつつ、理想を追って来た器楽編成によって、人がいつか迎える厳しい時のために鎮めの歌を歌うのは、極めて必然的なことでした。

愛する大地の土に返る魂が、手造りの楽器群と連れ添って歩む道行きには、自然の石が佇立ちとして似合います。そして、協奏曲としてのあり方や、旋法・律動の点でも、私なりの考え方や美意識をつきつめたものになりました。(三木稔)

【作曲年】一九八一年、今回が初演 【演奏時間】約20分 【編成】笛2・尺八6・琵琶・太神・胡弓・二十絃等・十七絃等・打楽器4(一人は指揮を兼ねる)・独奏二十絃等

METAPHOR

METAPHORは一九七五年五月の第二十四回定期で初演されましたが、今回の再演に際して一部、改稿しました。七人の独奏者と、それを囲む不定数の合奏群から成り、い・ろ・は・に・ほの五部分が切れ目なしに演奏されます。初演時の解

説には書きませんでした。『ほ』(ほとんど即興演奏による短かいコード)と『は』の直前の古典曲を借用しての自由演奏の部分以外、つまり『い・ろ・は・に』の四部分は、西洋現代音楽の二方法に拠りました。すなわち、音えらびは多数の十二音列の、しかも音程間隔がすべて異なる総音程音列のみを用い、音の分布密度の増減は、ポアンソ分布と呼ばれる数式から導きました。邦楽器による感覚表現の一つの方法的な試みでした。今回、『に』の部分をつづうの作り方による『似』に押し替えて、古典曲の借用はやめました。将来『に』はそのままにして、『は』を『波』に入れ替えるなどのヴァリエーションもあり得ると思います。(柴田南雄)

【作曲年】一九七五年、一九八一年改訂 【初演】一九七五年第二十四回定期
【委嘱】日本音楽集団 【演奏時間】約16分 【編成】独奏群——笛・尺八・三味線(胡弓と太神三味線持替)・琵琶・十三絃等・二十絃等・打楽器 合奏群——笛・尺八・三味線・琵琶・箏(十三絃・十七絃)・打楽器(合奏群の各パート人数は自由、欠けるパートがあっても可)

ディヴェルティメント

この作品は、あの十八世紀後半、モーツァルトやハイドンをたちウイーン古典派の音楽を彩った楽曲「ディヴェルティメント」(嬉遊曲)の名を持っています。邦楽器に作曲家たちの熱い吐息が盛んに吹きかけられていた頃この曲は生まれました。(一九六九年日本音楽集団の第十回定期で初演) 初演のプログラムにもあるように作曲者は、それまでの邦楽器とその音楽への偏見を反省し、私たちは西洋音楽から卒直に、しかも自由に人間の叫びを表現することを学んだが、その本質は日本の楽器にも与えられなければならないと思う。と述べています。ひとつひとつの楽器が孤立して芸を深めていくのではなく、皆で集まって楽しく合奏しようという精神が、「ディヴェルティメント」の名をいただいて音のひとつひとつにあふれています。

全体は三章よりなり、第一章は短調風で極く叙情的な歌、第二章は教会旋法風で異国的な色合いが表れています。第三章は早いテンポ、はつきりしたリズムをもった台奏、第一章のテーマも顔を出し、全部の楽器が軽快にはずんで終章を飾ります。(霜島記)

【作曲年】一九六九年 【初演】同年第十回定期 【委嘱】日本音楽集団 【演奏時間】約20分 【編成】笛・尺八・三味線等(『は』は低音又は太神、琵琶も可)・箏2・十七絃・打楽器2

65

定期演奏会 外国人による作品特集その一
Regular Concert
Music for Japanese Instruments by Non-Japanese Composers, No.1

六月十二日(金)午後六時半開演 青山タワー・ホール 構成・三橋貴風

- 一、Yu (露) H・J・コロロイター作曲(西ドイツ)
 二、Worlds for Solo Koto ネイル・マカイ作曲(ハワイ)
 三、和楽器室内交響曲 デイヴィッド・ロープ作曲(アメリカ)
 四、交織 ネブチャーン・海山作曲(ハワイ)
 五、Sixes T・H・ノルドグレン作曲(フィンランド)
 六、十面埋伏 (委編・初演) 王燕樵作曲(中国)

賛助出演 増田睦実(ソプラノ) 友情出演 ネブチャーン・海山(尺八)

音楽とは通訳のいらない世界共通語であることは、今更言うまでもありませんが、海外における邦楽の演奏も最近では珍しいことでは無くなりました。「真に民族的なものは真に国際的である」とよく言われますが、私たちの民族音楽及びその楽器が今後ますます、真に国際的になって行くためには、世界の他地域でそれを披露するだけでなく、お互いにその創作における交流を進めて行く必要があるでしょう。現在までに様々な演奏団体や個人の方々が外国の作曲家に委嘱をした作品も大分増えてきたようです。それらの中には西洋楽器とのアンサンブルのための作品もありますが、今回は邦楽器のために書かれたものだけを特集してみました。

プログラムは、日本音楽集団が初めて演奏した外国人の作品であり、一九七二年の第一次ヨーロッパ公演の折に西ドイツで演奏した、コロロイター作曲の「ハズ」や、ハワイ大学教授のネイル・マカイの筆のための作品「Worlds」、集団には馴染み深い作曲家デイヴィッド・ロープによる八和楽器室内交響曲、尺八奏者としてジャズなどに取り組み活躍しているネブチャーン・海山作曲の「交織」を、ご本人の演奏で、又、「邦楽4人の会」の委嘱作品であるノルドグレン作曲の「Sixes」、そして現在来日中の北京中央楽団の作曲家王燕樵に委嘱した「十面埋伏」といった内容です。尚、当日会場に来ていただける作曲家の方々にはお話を伺いながら、その作品を聴いていただこうと思っています。

このようなコンサートをシリーズとして続け、世界の多くの地域の方々の作品をご紹介して行こうと思っています。当日の会場には、皆さんがハッとするような新鮮な音楽空間が広がるかも知れません。ご期待下さい。(三橋貴風)

66

定期演奏会 語りと音楽特集 その四
Regular Concert
Folk Tales with Music, No.4

七月六日(月)午後七時開演 青山タワー・ホール 構成・長沢勝俊

- 一、八郎物語——ダンス・コンセルタントⅢ(東京初演) 若林一郎詞・三木稔作曲
 序曲／八郎と子どもたち／冬の訪れ／イワナとり／イワナ喰って飽きる／ひとりぼっちの八郎／たつこ姫の笛／南宗坊の出現／竜と竜との闘い／八郎歌る／さすらい／津波と闘う／終曲
 二、冬の一泊・パート2(東京初演) 長沢勝俊作曲
 三、竹取物語より「竜女の玉」 海津勝一郎作・長沢勝俊作曲
 客演 稲垣隆史(劇団民芸)

「語りと音楽」の特集も今回で四回目をむかえることになりました。民話と古典から各一曲を取上げ、語りと音楽の新しい接点を追求するとともに、子供の世界を画いた合奏曲を加えた楽しいコンサートにしたいと考えております。八郎物語は秋田地方に伝わる八郎海にまつわる民話で雄々しくも心やさしい八郎の雄大な物語です。南の血が流れていると自認し、ふるさと徳島を素材とした数々の名曲を書いた三木稔が、ここでは北の世界に素材を求め、その気候風土から生れたこの民話の世界を鮮烈に画ききっています。八冬の一泊・パート2は昨秋、私が書いた作品で冬空に舞う童心を画いた作品です。その鈴音に胸をふくらませて大自然の中に向う子供たちの心をうたった「序曲」。ピッカピカのスケートではない「氷すべり」。「雪の夜」の家族団欒の中で語られるおじいさんやおばあさんとの語り。ビニール服ではない竹と紙でできた手づくりの凧による「凧と凧」。そして「終曲」の五つの章よりできています。八竹取物語より「竜女の玉」はわが国最古の古典といわれているこの物語を国文学に造詣の深い海津勝一郎さんが大胆に脚色した、かなしくも美しい物語です。今回は再々演になりますが、各楽器にそれぞれ的人物をあてはめ、かぐや姫は二十絃箏、少将の君は篠笛、竜女は琵琶等、楽器と語りの掛け合いの中で両者の有機的なむすびつきを目指したものです。語りの稲垣隆史さんとは今回が三回目のおつきあいです。劇団民芸の舞台で数多くの役をこなしてこられ、また音楽にも大変強い稲垣さんが、民話と古典の世界をどのように語りわけて下さるか大いに期待を持っています。音楽が決して語りの伴奏でなく十分に自己を主張しつつ語りと手を取りあって立体的な舞台をつくること、また日本の楽器になじみのうすい方々にも楽しく聴いて頂きたいというのが今回の大きなねらいです。どうぞご期待下さい。(長沢勝俊)

入場料 ●前売二〇〇〇円・当日売二五〇〇円 ●中高生席 一二〇〇円

●団体割引 一五〇〇円(十人以上の団体)

チケット取扱い 渋谷東急観光ブレイガイド・新宿チケットビュロ・銀座鳩居堂
お問い合わせ・電話予約 〇三三四〇九一五三七四(日本音楽サービス)

※団体割引は集団事務局でのみ扱います。

友の会会員募集

日本音楽集団では、演奏会などの催しのお知らせや(B会員)、定期コンサート・シリーズを一括して割引値で予約できるA会員を設けております。入会は随時です。
ので、ご希望の方は次の要領でお申し込み下さい。

A会員・定期コンサート・シリーズ半年の三公演、又は一年の六公演のチケット割引と座席確保、その他の催しのお知らせ、機関誌「邦楽現代」(年二回刊、定価四〇〇円)、広報誌「邦楽現代ニュース」(随時発行)の無料進呈、会費は三公演のチケット代を含み半年で五〇〇〇円、または六公演のチケット代を含み一年で一〇〇〇〇円。

B会員・定期コンサート・シリーズ及びそれ以外の催しのお知らせ、機関誌「邦楽現代」、広報誌「邦楽現代ニュース」の無料進呈。会費は一年二〇〇〇円。
申し込み方法 (1)各演奏会場で。

(2)現金書留住所、氏名、電話を明記し、会費を添えて日本音楽集団へ。

(3)銀行振込 東京銀行渋谷支店普通預金 〇〇〇-〇-〇〇〇 日本音楽集団友の会宛。住所、氏名、電話、会費を銀行振込したことを明記して郵便にて事務局へ郵送。

(4)郵便振替 振替番号、東京 8-73659 日本音楽集団宛。友の会入会希望と明記。



第62回定期 内田とも子作曲<氣流>

日本音楽集団1980年度後期写真展



第63回定期 三木作曲<松よ>

神戸公演
長沢作曲<ファンタスマゴリア>

第6回関西定期(京都) 三木作曲<阿波の狸囃子>



矢崎明子

矢崎明子さんは、華楽者でいらっしやいます。地唄三味線を専門とする数少ない演奏家であり、演奏活動、後進の指導にと精力的に活躍されています。

一九五七年より七五年まで「邦楽4人の会」の一員でいらっしやいましたが、フリーになられた現在、「やっと地唄三味線の良さがわかるようになりました」と言われる言葉に、自信と未来への意欲が感ぜられました。

長年、この道一筋に歩まれたご苦労や楽しかったことなどを伺ってみました。

矢崎——生家は信州で代々雑穀商を営んでおりますが、一番上の姉が生まれた時、記念にとピアノを買ってくれたほど、父は音楽好きな人でした。お事は小学校三年のころから、三味線も女学校一年のころからやっております。

芸大へは夢で入りました。当時、音楽学校の風潮は、何となく邦楽が片隅に追いやられている感じでしたので、くやしなくて、見直してもらわねばと、専門の他にピアノや声楽など、すべての学課を頑張って勉強し、邦楽では学べないことを色々修得することが出来ました。

三味線を主に手にするようになったきっかけは、唯是麗一さんが入落葉の踊りでコンクールを受けられたときに、私が三味線、菊地悦子さんが十七絃をやったのがはじまりのような気がいたします。

又昭和三十一年、三年の頃から、NHKの第二放送夜九時から毎月一回、吉川英史、岸辺成雄両先生の司会で、現代邦楽鑑賞会の時間があり、その番組では主に邦楽の作曲家、竹屋正邦、小野蘭、藤井凡大の諸先生が随分作曲されました。この番組でよく弾かせていただきましたが、三味線をとりあげた、藤井凡大作曲の二種の三味線のためのソナタ（長唄三味線と地唄三味線の二重奏曲）はそもそも現代邦楽の先駆けといえる曲でした。古典にはなかったリズム、音の動き、曲想など大へん新鮮に感じられ、一生懸命練習したことが昨日のことのように思い出されます。

華などと比べて三味線人口は少なく、自然作品が少なく委嘱なさったりして、色々ご苦労が多いと思いますが。

矢崎——やはり三味線という楽器は自分



で音を作らなければならない面が強い、細かいニュアンスを出す点がむずかしいので、一般的には華などに比べ、習う人も少ないのではないかと思います。以前にくらべれば盛んになってきたように思います。又他の楽器に比べ、制約も多く現代に生かすことは困難な楽器だと思いますが、やはり三味線の特性を生かした作品が欲しく（特に古典、現代共ソロの曲が少ないので）六、七年前よりぼつぼつ委嘱をはじめたわけです。

委嘱の第一作目を竹屋正邦先生にお願

いし、北原白秋の詞による弾きうたいの曲（言問）を書いていただきました。古典は大体形が決まっているのですが、現代作品のソロのものとなりますと、随分現実に表現しなければ形になりません。発声、唄い方など苦労いたしました。地唄しか唄ったことのない私には、あまりにも一色しか表現できない貧しさを痛感いたしました。そのあと先生の作品（手鏡をよめる）という良寛の詞によるものを弾かせていただき、次に一昨年私のリサイタルのために書いていただいた（愛の歌）（榮華秘抄の中より三首を選び）で、三つのそれぞれの愛のうたいわけに又々



苦心いたしました。同じリサイタルで三木稔さんに八紫の譜を書いていた、大へんよい勉強になりました。それから変わった試みとして、三木さんの長唄三味線独奏曲として、一九七四年に書かれた八奔手Vに挑戦してみました。表題のごとく自由奔放な撥さばきを要求される曲で、地唄三味線の重い撥でひくことの困難さは、充分わかっておりましたが、どうしたら弾けるだろうかと思いましたが、と重さ、腕や手にかける力の配分などいろいろ苦心しました。古典にない高度のテクニクを要求されることによりテクニクの幅もひろがり、可能性も追究でき、苦しい中にもたのしみがふえてまいりました。

りました。

今後どのような目標があたりてですか、リサイタルのご予定もお聞かせ下さい。

矢崎——そうですね。やはり古典を更に深めてゆきたいと思っていますし、三味線であれば表せない、楽器のもつ特有の美しい音色を生かした作品を書いていただくために、委嘱をつづけてゆきたいと思っています。又、今迄の経験を生かし後進の指導にも力を入れてゆきたいと思っています。今年は十一月二日にイイノホールで地唄三味線による八古典と現代Vというテーマで二回目のリサイタルを開く予定です。

簡素な中にも豪快で思いきり合理的な設計が目立つ新築したばかりのお宅に伺いました。矢崎さんのひかえめて古風な落着きの中にも新しい曲にとり組まれる若々しいエネルギーと住居とが、何となく共通しているように思えました。時間に追われる毎日で三味線や華以外に興味はないそうですが「家事は家族の中でやれる人がやるんです」と言われるように高校生の息子さんとご主人の支援があつてこそ、ハードスケジュールをこなしてこられたものと思います。集団の団友として折々荳風に触れさせていただいておりますが、十一月のリサイタルのご成功と今後の一層のご活躍を期待いたします。

(レポーター 鶴野和子)

音楽家とききてがつくるジャーナリズム

音楽の世界

- 音楽家・舞踊家と愛好家が自由に発言できるひろばとして、ユニークな成長をとげつつあります。
- 日本の音楽の発展の芽ばえを、ともに考え、ともに育ててゆく、自由で進歩的な音楽ジャーナリズムの確立が私たちの願いです。
- あなたにとってひとつでも心にとめる記事がありましたら私たちのようこびです。

●本誌は次のところでお求めになれます
日本楽器（銀座店・渋谷店・名古屋店・大阪心斎橋店）、丸善日本橋店・分音会
読書センター、美和書店、友好堂、他

お問い合わせは電話(03)200-4924
日本音楽舞踊会 議

〒160 東京都新宿区百人町1-7-3
第2富士電工ビル110号
1部450円/50円 6ヶ月/2500円 年刊/5000円
編集 東京1-65140

新発売!

坂田誠山監修

誠和銘尺八

高品質ながら普及管として

低価格(5万~10万)にて提供

発売元 誠和音芸

代表 坂田誠山

〒156 東京都世田谷区桜3-18-18 TEL.03-420-0483

清水義矩

清水義矩氏は打楽器奏者、マネージャーとして創立当時より一九七五年まで日本音楽集団のメンバーでした。退団後は、全国の現代邦楽のアマチュア合奏団の指導に情熱を傾けて、各地を飛び回って活躍なさっています。

本号では、合奏団の特集を組んでいますので、現在西日本中心に幾つかの合奏団と大学のクラブを指導しておられる清水氏に色々お話を伺ってみました。

○合奏団を指導するようになった経緯

集団の事務局にいた頃、——当時はまだ、集団を知らない人が多かったのですが——、その集団を宣伝しなければならぬ立場にあったのです。説明してもなかなかわかってもらえず、とうとう、とにかく一度聞いてから後で良いか悪いか言ってみよう、もし悪かったらばくが責任とりますから——、と言いました。そうすると、大体皆、良かった良かったと言ってくれるんです。そうやっていて感じたことが、底辺活動がなされていらないということ。そういうところが、邦楽の発展や理解を助けていたのではないかとこの印象を受けたんです。そこで、ぼく

みたいなばかなのがいて、こういうことしないと、色々事態が進まないのではないうかと思いついて、ひとつやってみよう、ということになったわけです。

東京ではぼくが指導している合奏団が三つありますが、そのひとつが「邦楽合奏団翔」。どうしてこのグループができただかという、ぼくが東京の大学で現代邦楽を教えるようになってから十二年になるんですが、大学の学生というのは、お節や尺八、三味線などを、クラブに入ってから初めて触れて知り、皆四年間楽しんでいるところから卒業するとそれっきり邦楽器との縁が切れてしまうんです。そこで社会人になってもそれを継続させたいという声があり、そういう大学のクラブのOBが集まってできたんです。五三年に結成して、去年（五五年）に第二回目の定期演奏会を行いました。

最初、メンバーは二十人ぐらい、その後、色々入れ替わりもけっこうありましたが、若い時やりたかったけどできなかった人とか、子供も大きくなって落ちついたという三十歳代ぐらいの人もぼつぼつ増えてきました。

○「翔」の練習活動について

今まで、二回の定期演奏会を行い、それを目標とした練習活動をやっています。したが、今年からは演奏会のためだけでなく、もっと色々音楽のことを知ってもらうための練習を考えています。例えば、邦楽でない音楽を聞いたり、集団のレコーダーを聞いたり。又、邦楽の楽理のようなものを洋楽とミックスさせて話したり、発声法の練習をしたり。

それから、皆、職業を持っていて忙しいでしょ。月二回でも忙しい人は出て来れない。そういうハンディを持った人たちが、レベルの差によってメンバーを仕分けするんです。例えば、ウィーク・デーに二つぐらいのいい人とか、ママさんグループとか。

家庭を持っていて自由に来れない人でも、皆で合奏やっていると楽しくなるんです。すると、月一回ぐらいご主人などの了解を得てやってみようかという風になって来る。一回来ればもう後はしめたものです。

○合奏の指導だけでなく、人間同士のつき合いの場も大切にする

合奏団というのは、音楽を仕合いながら、お互いに結ばれていきますよね。その音楽以外の場で、例えば練習終わったあとお酒飲みながら色々なことの相談に乗るんです。よく適齢期の男女から結婚問

題で相談を持ちかけられる。するとこちらも年の功でアドバイスすると、けっこううまくいって、今年になってカップルが三組も成立しちゃいましたよ。

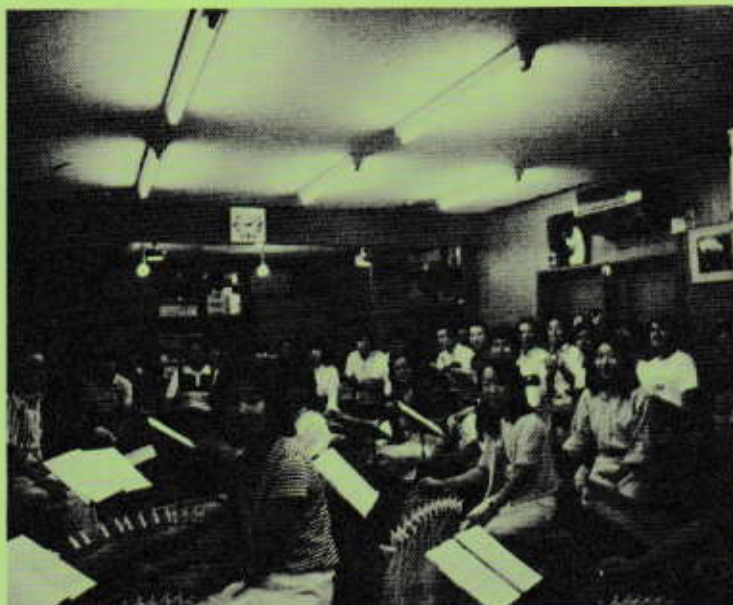
○「グループ・21世紀」について

このグループは昭和五〇年に結成された、プロを目指しているグループです。もともと芸大の別科を卒業した人たちが集まってやっていたのですが、一部のメンバーが郷里に帰ってしまった、仲々上京できないという状況にあるので、練習が思うようにできない……。そこで最近、東京在住組と、地方から上京してやる組に分けて活動していますよ。定期演奏会ではいっしょにやっています。

○地方のグループについて

現在私が指導している地方にあるグループは、岡山邦楽合奏団、徳島邦楽合奏団、高松邦楽合奏団、そして博多にある九州邦楽合奏団です。

地方の場合は東京とちよとちがうんです。つまりアマチュアとかプロとかの区別は考えないようにしているんです。本当だったらプロになりたいけど、生活できないから、お勤めしているという場合が多い。だから、技術的には大体において地方の方がレベル上ですね。中央には負けないという根性があり、熱心に勉強します。地方の人は言葉で言わないで実践します。



岡山と徳島の合奏団は過去において数回、ジョイント・コンサートをしました。地方の人たちは地元意識が強く、その枠の中に入りやすい。『蛙が大海を知る』ごとく、他の合奏団とやって互いに良いところを吸収し合うために試みました。今では皆で機関紙を作っていますよ。お互いの共同作業で情報を交換しているわけです。例えば一団体で委嘱すると大変だから大きなサークルとする。そして

て初演は全部の合奏団ですとかね。

○プロもアマもいっしょにやりたい

邦楽の社会というのは家元制度が発達しているからどうしても閉ざされた社会ですね。その傾向は地方へ行けばゆくほどあると思います。それで、その邦楽社会の上に立つ人が邦楽器に触れなければものすごく人格のある人なのに、尺八もったり、お箏の前に座ったりするとガラリと人が違ってしまふというようなことがある……。それを伝統と言ってしまうばそうかもしれないけど、やはり、これからの世の中の色々な情勢を考えてみたら、そういうことはすごくマイナスで、やはりいいものはいいものでどんどん取り入れたいですね。かっこうを構えないで。

そして、これからアマチュアもプロも皆が日本の音楽を愛せる場を作ってゆきたいものです。

(レポーター)

(霜島素子)

露秋銘 尺八

西 田 露 秋

〒794 今治市新谷新田甲798

電話 0898-48-1097・1257

高橋明邦

打楽器奏者である高橋明邦さんは、日本音楽集団の団員であると同時に、新星日本交響楽団のメンバーでもあります。桐朋学園大学音楽学部打楽器科出身ですが、れっきとした洋楽畑の人ですが、集団の団員となつてからは長唄囃子も勉強し、現在は洋楽と邦楽のバイブ役と自認する、ユニークな存在です。

今回は高橋さんが自認している、洋楽と邦楽のバイブ役としての私、ということを中心にお話を伺ってみました。まず集団との出会いから。

高橋——集団との出会いは、当時団員だった清水義矩氏がマネージした録音の仕事をしたのがきっかけでした。その時、鼓の堅田啓輝さんといっしょで、当時ぼくはまだ桐朋在学中でしたが、もともと和楽器は好きでしたから興味を持ちまして……。それから、北軽井沢でやった集団の第一回目の合奏研究会に行つて、八子供のための組曲、八古代舞曲によるバラフレイズを聞いて大変感激したのがやはり集団に入る大きなきっかけになったでしょう。その後、第一回目のヨーロッパ公演が計画され、集団がちょうど

打楽器奏者に不足していたこともあって、一九七二年の春に入団しました。

でも、入団して最初の二、三年は一時東郷に在籍したりし、洋楽と邦楽の間にいて、音楽上、人間関係上などの悩みを処理し切れなくて悶々としていたんです。

そういった頃、藤舎成敏さんに「鼓、やらへんか？」と声をかけられまして、長唄囃子の特訓を受けました。その時、邦楽の打楽器というものに直に触れることができ、これが大きなきっかけとなつて、自分の進む道みたいなのをはっきり探めてきたように思います。

新星日本交響楽団には七七年に入りまして。オーケストラは大体、曲目、やり方など既にレールが敷いてありそれに乗るだけですから、余り入りたくなかったのですが、新星はそういう点、可能性のあるオケだと思つて入りました。新星の

方も私の立場を良く理解してくれて、特に昨年、残念ながら若くして交通事故で亡くなった、運営委員長の池田さんもその点理解して下さっていたんですが……。

これは暴言かもしれないけど、こう思うんですよ。日本にこれだけのオーケストラがあるのに、相変らず外国のオケにファンを持ってゆかれ、日本のオケに本当に共感を持ったファンがつかない。なぜなら、オケが向うのまねをしている段階ではファンは絶対につかないと思うんです。

例えば、新星の定期で伊福部昭氏の八日本狂詩曲Ⅴというのをトリで（邦人作品をトリでやったのは初めて）やった時、「これが同じオケかと思うほど生々とした演奏だった」という批評がありました。

このことからやはり日本人の発想を持った演奏表現でなかったら最後までだめだと思いました。ドイツなどへ留学しても、向うの音楽は参考であつてその上に自分の音楽を作つてゆかないと……。そのためには自分の生まれ育つた日本の音楽のことももっとと知る必要がある。そこから発する感情表現を以て新たにオーケストラでの音楽づくりを考えてゆかなければ。

そう思うからこそ、洋楽の方の仲間にも集団の演奏会を勧めるんですが、まだなかなか興味を持ってくれない……。私にもっとと実力があれば、良いバイブ役





になれると思うんですが。実際は思うようにゆきません。

邦楽側からみても、洋楽に色々学ぶことはあると思いますが、邦楽の合奏技術は大したものだし、勘も優れていると思いますね。

三木さん作曲のオペラ「あだ」のロンドン初演に参加しましたが、その中で、長唄の「鶯娘」の一部を歌が、三味線や鼓を含むオーケストラといっしょにやる場面があるのですが、あっちの人の音を聞いて、ものすごく歌だと思ったんです。日本のどこかの劇場でやっている演奏より人の心を打っている。歌というのはやはり発声練習して、自分なりに美しい声にして自分なりにコントロールして、初めてその時の感情が表現されるの

だと思いましたね。他にも、あちらの人は感性が柔軟だし、これは一番大切なことだと思っていますが、音符を心で理解している点、日本との違いを感じましたね。

今度六月にアメリカのセントルイスで「あだ」が上演され、行きますが、アメリカ人の歌手やオーケストラがどういう風にやるかとても興味ありますね。

大の車好き、車があればごきげんということ。しかし現在の生活状況ではそれも色々大変、今はオープン・ツーシーター・スポーツカーがほしいらしい。手先も器用で、海外公演の安ホテルで軒並み結っていた各部屋の水道管をヒョイヒョイとバケツを持って直して歩いたり、事務所の石油ストروبや冷蔵庫の清掃を見兼ねてやってくれたり、お料理も自分で工夫して作るのが好きという、女まざり。三年前に魅力的な奥さん（本団の専奏者木村玲子さん）をもらい、「結婚してからは奥さんの料理の方がおいしいのであまりやりません」。

彼はその独自の信念で打楽器奏者としてばかりでなく、若手のトレーニングにも情熱を傾けてきました。そして今後は「洋楽と邦楽のバイブ」として、打楽器ばかりでなく指揮などにも積極的に取り組んでゆきたいということ。最近組織運営の第一線に参加する中堅として、責任ある立場になりつつある高橋さんに、多くを期待したいと思います。

（レポーター 霜島素子）



様々な打楽器・笛から繰り出される目くるめくリズムの鼓動は感性の世界を離れ、いつしか夢幻の世界へと我々を誘（いざな）う。ゲスト・ミュージシャンの強力なサポートを得、話題の邦楽打楽器奏者集団「だだ」が世に問う邦楽フュージョンの音世界!!

ぐるーぷ・だだ ●ETJ-85011 ¥2,500

夢

祭り／手鼓舞／屋気楼
調べ／曙光／嵐行／嵐気流

模

歌拍子／夢／曙光
全10曲

様

★ぐるーぷ・だだ
藤吉成敏／岸崎太一
東城 昇／西川浩平
型田晋輝／高橋明和
望月太八

★ゲスト・ミュージシャン
村上“ボンダ”秀一（Dr.）／和田アキラ（G）
渡辺 達（B）／中村 哲（kb）



ETP-72324 ¥2,300

●組曲 七夜伝説

- A. 1. 天空—ふたつの星
2. 豊満—天上流れる川
3. 絶女—心に秘めた愛
4. 牽牛—愛の激情
- B. 1. 祈願—ふたりの架け橋
2. 燃焼—七夕の恋
3. 雲橋—別離の時
4. 静寂—ふたつの星

心への音楽

TOSHIBA EMI



心に残ったものから

木村重雄

この時期に接した日本人の作品で、心に特に残った作品ないしは演奏が2曲あった。ひとつは「沢井忠夫Xoto Concert」(10月20日、日本青年館ホール)で初演された松村積三の△幻想曲△。松村の年ともいべき豊饒の一九七九年以後、彼は演奏会用の作品を殆ど書いていない。あるいは作曲されたかも知れぬが、私は接していなかった。だから、と言うわけでは決して無いが、沢井が全人的な技術と音楽性のすべてを燃焼させて初演した△幻想曲△から、再びあの年の△第2ピアノ協奏曲△や△暁の讃歌△のような松村のCesatiが手ごたえ確かに感じとられ、心を満たされたのだった。それは疑いもなく作曲家の肉感的な成熟と表現手段の熟達とがごく自然に融け合い、松村自身が訥訥として、時には熱っぽく心の中にある真実のみを語りかけてくる口調と一致して、鳴りひびく音楽のなかに作曲者の人間そのものが、確実な手ごたえをもって感じとられたのである。といっても、たとえば聴き手が松村の人間を直接知っているかどうかは問題ではなく、

おそらく私たちがたとえベートーヴェンやバルトーク個人とは全くかわりないのと同じように、彼についてなにも知らずとも、あの音楽からくる訴えかけにより、作曲者の真実が正しくうかがいられるということ、別な言い方をすれば作品そのものの誠実な訴えかけは、松村の人間をもつてしなれば成り立ちえないとすら言える。この作品が、一九八〇年に接した音楽のうちもっともすぐれたひとつとして指摘する理由はそこにある。

いまひとつは、新作ではないがそれよりほぼ一週間前の「日本音楽集団」による「秋の総合定期演奏会」(10月14日、都市センターホール)で接した三木穂の△わ△(一九七六)で、宮田耕八郎(尺八)、坂井敏子(三味線)、半田淳子(琵琶)、野坂恵子(二十絃箏)、宮本幸子(十七絃)と高橋明邦(打楽器)の六人による理想的なアンサンブルの醍醐味でそれだけが高度の演奏技術と固有の音楽性を持ち、しかも自発的な即興性にもめぐまれた名手たちによる気ままな語り合

いにも似た音楽は、洋楽という室内楽のもっとも至高な境地をあらわすもので、残念ながらこれほど豊かな語り口をもつ対話を、日本人のコンサートで聴くことはめづらしい。三木のそれぞれの個性を巧みに活用した作曲も彼のひとつの到達点をしめしているが、それをさらに屈託なく再創造した六人の名手たちに、改めて敬意を表し、拍手をおくりたい。

このほか、井上道義指揮の「新日本フィル」12月定期(12月15日、東京文化会

この期の大作では、「沢井忠夫・コト・コンサート」で初演された石井真木の△華と管弦打楽の爲の雅影△をあげたい。私は、この作品と演奏に、これまでになく創造的なダイナミズムを感じたからである。

沢井忠夫の特長は、前回のこの欄でもふれたが、その奏法の荒々しいまでの力感と、彼自身の作品から察せられる創造的な幅の広さ、スケールの大きさである。それを裏づけているものに、次のような思想があるようだ。彼は日頃、特に洋楽・邦楽の別を考えないということ、現代邦

館△でひさしぶりに接した三木の△破の曲△の野坂の好演も作品の真価をあらためて考えさせてくれたが、ほかにいくつかのリサイタルなどがあり、それを聴けなかった不勉強を棚上げして、邦楽器が着実に日本の音楽に根を下ろし、ごく日常的な営みの一環として特別扱いされることなしに評価をうるに及んでいる事実は、私などにとっても喜ばしい限りである。

小宮多美江

楽の創造も、近々十数年のそれとしてとらえるのではなく、△六段△をはじめとする古典から連綿と続けられている創造的発展の、現代における一段階としてとらえているということ(『音楽芸術』80年1月号)である。

一方、石井は、△響層△などこれまでの作品でも、オーケストラを、伝統的な枠にとらわれず、また洋の東西に限らず自分の欲するひびきを実現し得るものとして駆使してきた。それでもなお日本の楽器との融和は決して容易ではないはずだが、事という意外に打楽器的要素の多

いひびきをこのハ雅影は「管弦打楽」がよく包みこんで、異和感を克服している。この成功には、沢井の特長点も大きくプラスに作用したのではない。

石井は、この作品に、古曲ハみだれ輪舌Vが影響しているのとべているが、いわゆる現代の性格変奏という形も、すでに彼が追求してきたものであり、ただ単に日本の伝統形式に目をつけたというのではなく、芸術形式のもっとも本質的なところでの共通普遍的なものととしてとらえたところに意味があると思う。

いずれの芸術伝統に対するときも、その美への畏敬と共に、創作という営みにおいては、一歩下がるのでなく、組み敷いて自己を表現するのだから、真の創造とはならない。そここのところのダイナミズムを、私はこの作品から感じとったのである。

創作面でもうひとつ記しておきたいのは、初心者のための教則本づくりや、合

奏の演奏家沢井忠夫作ハ二つの群のためにVを聴いた。おしなべて作曲家の作る作品には多かれ少なかれ観念的なところが残るのに反し、演奏家は現実の音そのものの力に迫られて作曲する傾きがあるもののように、彼の場合もそのせいか音の座り方が確実であることが特に感じられた。邦楽では作品の創作は演奏の技

奏のためのやさしい曲が、日本音楽集団の定演で発表されたことである。すでに書いた「赤旗」2月21日付の内容は略すが、今後は、ひろく一般聴衆と共有できる場にとんどん持ち出して欲しい。

似たような要求から企画されたのかと思うが「邦楽4人の会・名曲コンサート」(9月4日)があった。曲目中驚かされたのは久本玄智のハ演奏会用練習曲第1番・第3番Vだった。久本についての評価は、筆にピアノでやるようなことをやらせた、ということ、これは私ばかりの思い込みだったろうか?

当夜の高畑美登子の演奏は、この作曲家に対するそのような先入観には誤りがあつたのではないかと感心した。演奏家の技術的な立ち遅れが、作品の真の価値をくもらせていただけなのではないか。と。ぜひ、またさく機会を得たいと思っている。

土田貞夫

術的練磨の上になされるのが一般で、柘屋正邦などはそのような伝統の上に創作活動を続けているが、沢井忠夫の場合様式的には伝統的なものとは全く違った独自のものを打出している(それ故に理解されることもまた少ないようだが)にもかかわらず右に書いたような邦楽家に共通な特性を強く感じさせた。

西潟昭子の三味線の会では外面的な音の面白さが追求されている中で、佐藤聡明のハ究極の旅Vは直接内面世界の表現に迫る作品として注目された。極度に節約された音による透った空間が三味一挺、琴二面、尺八四管の構成で現出されたがその音の節約ぶりは時に言葉不足を感じさせる程であった。しかし饒舌よりは寡黙である方が音の過剰に悩まされる昨今遙かに有難いことである。

この曲とまさに対蹠的であったのは日本音楽集団の定期公演「笛と打楽器の会」で藤倉雅峰が自作自演したハ風河Vである。鋭く鋭り込んでくる気迫に満ちた演奏には武道の真剣勝負を思わせる迫力があつた。繊細で幽玄な美意識の裡にひそむ厳しさと激しさが日本芸能を支えていることを改めて思わせるものがあつた。書き落せないのは野坂恵子が身体(心)障害者のために備したりサイタルである。童謡やイギリス民謡や十二音主義の音楽まで二十絃箏のすべてを説明するようなサイタルであった。当日初演された斎藤隆介作の物語リハペロ出しチョンマVは内容からいって嘗てなされた平井澄子

の名演によるハ佐倉義民伝其兵衛渡り場の段Vを想起させた。音楽が社会的連帯を志す場合適切な内容といえる。話は子供が主役であるだけに痛切であった。友竹正則の語りを支えた野坂恵子の好演は簡明な美しさを琴に与えた三木稔の手腕に負うものである。集団の一月公演で彼がハ松よVというユニークな歌をきかせてくれたのは嬉しいことであつた。

最後に是非書いておきたいのは、中里介山の「大菩薩峠」初版本には実名で登場してくる普化尺八の高橋空山のレコードが普化宗史刊行会(電〇三十三六九一四〇二六)から発刊されたことである。公衆の前で演奏することのなかった同師の尺八のレコード化は幻が現実化したというところで、高弟である藤田雄蔵の努力が効を奏した結果である。第一面の最初の曲ハ虚霊Vは普化尺八の中でも名曲で(秘曲はこのように形で公開されることはない)、高度に宗教的な境地を示す演奏である。この録音によって普化尺八の秘法が後世に伝えられる意義は大きい。高橋空山編曲とあるが殆ど創作に近いのここに取り上げた。

富樫 康

二十絃箏霜月の会その二(11月5日、青山タワー)、野坂恵子二十絃箏エコーは第五回公演を迎えて、いよいよ二十絃箏が日本楽器としての存在感を確実な

ものとして認識され、新しい名曲が次々と生れ、奏者が育ってゆくのを誰しも押えることはできないことを実感した。この会で吉村七重の強く三木稔のハ華や

ぎ」が、野坂とは一味違った良さをみ

せ、間宮秀生の「四面の夢」のための音楽
Vが二十絃で弾かれて、元来難解と思
われていたこの作品が、奏者も聴者も、
弾き易く、ききやすい音楽に響いたの
はなからうか。野坂と中丸がひいた牧野
由多可の新作「八月」も、しみじみとし
た奥行きと陰影のある筆の二重奏曲だっ
た。肥後一郎作曲、尺八（三橋貴風）、
四面の夢（野坂、鶴本、吉村、滝田）の
「完結詩」は解りやすく、しかも高尚な
哲理を秘めている名品だ。この二曲も後
に残るだろう。

三橋貴風第一回尺八リサイタル（10月
30日、ABCホール）。日本音楽集団及
び「楽」で活躍中の三橋貴風が一人でデ
ビュー、既に八年の経験がそれだけの自
信をつけたわけだ。古典本曲と松村植三
の「詩曲第一番」、諸井誠の「竹籥五章」
V、柴田南雄の新作長管尺八のための「
霜夜の砧」、唯是麿一の「尺八と筆の協
奏曲第三番」Vと、どの作品に対しても適
切な解釈と模範的な演奏をしてみせた。
彼の奏法はまさしく琴古流で、高音のコ
ロコロは絶妙。むら息も覇気がある。楽
器にも恵まれたようだ。その尺八はアメ
リカ人トム・ディーヴラー作の由。

同じ集団のメンバー坂田誠山も続いて
第一回尺八リサイタルを開いた（12月11
日、青山タワー）。この人も地味ながら
十分力量のある人。体力は抜群で余裕の
ある吹奏をする。これからまだまだ伸び

る可能性がある。

沢井忠夫コンサートが石井真木指揮、
新日本フィルハーモニー交響楽団の出演
で10月20日、日本青年館で行なわれた。
その中で、肥後一郎作曲「八等と絃奏合奏」
のための一楽章Vに一番感動した。ぬら
ぬらしたぬめりのある音楽。弦奏の沈ん
だ、幾分奇異で妖怪な音に支えられてそ
れとなく弾き出される筆の一言一音が、
何ともいえない異様なアトモスフェアを
つくりだす。時々ヴァイオリンソロのポ
ルタメントがあり、そのあとに浮び出る
筆の簡単な強奏が、一つの徹底した妖し
い空間を作りだす。聴者はその特異な空

盛大で有意義な催しだったバンムジ
クフェスティバルのなかで、「古楽器
の新しい世界」と銘打った9月25日夜の
演奏会は現代邦楽にとって重要な三つの
作品演奏を含んでいた。マルク・タレー
作曲の和洋楽器を共演させた「出会い」
もさることながら、純日本楽器による
「ふしぎな物語」「さつきながめ」
「雲煙」の三作が作品演奏共にすぐ
れていた。

「fable」(三枝成章)は西潟
昭子がすでに何度か演奏してきた曲だが
この日の西潟の演奏は、一見弾き放しに
もできそうなこの曲の要所要所に、音楽
的な起承転結のクサビが適確な視点で打

間に、うっとり吸い込まれてしまった。

これは一種の呪術的な世界だ。
佐藤允彦作曲琵琶五面による「一水四
見」V。これは芸術祭参加番組として10月
1日NHK・FMで放送されたもの。こ
れまでの琵琶音楽とは一風違って、各種
琵琶を用い（鶴田錦史、半田淳子ほか）、
録音技術も導入して琵琶の深遠で魔力的
な特質をいろいろテクニクを凝らし
て引きだしている。佐藤はジャズビアニ
ストとして知られているが、日本的感性
が鋭く、きわめて徹底のある作品であ
った。

長尾一雄

ち込まれてあり、しかもまた、そのよう
な形式感を与えることによって失われる
おそれのある曲自体の自由な活性が、生
き生きとして形式を乗り越えんばかりに
発揮されている点で、種に見るすくれ
たものであった。それは10月31日の西潟
昭子リサイタルで、これもすでにたび
たび演奏された藤原真の「八琴のための
たゆたい」Vについても言えることで
あって、西潟のこうした充実には三絃や
箏という楽器の上に生きている古典音楽
上の形式と感性のバランスを彼女が着々
と身につけてつづけていることが裏打ちとして
想定され得る。

「さつきながめ」は柴田南雄が赤尾
三千子のために書いた横笛独奏曲で、こ
の秋に発表された三橋貴風リサイタル
（10月30日）での尺八独奏曲「霜夜の砧」
と共に、柴田の邦楽器のための二大佳作
と言えよう。かずかずの前衛的な試みを
経て柴田は邦楽器のために非常にオーソ
ドックスで且つ形容の豊かな独白を書い
たわけで、そこには古典の精神へのはる
かな距離をへだてての接近が見られる。

他に沢井忠夫 KOTO CONCERT（10月20
日）で、松村植三の「幻想曲」もまた、
古典の深淵を深くのぞき見ている。この
ような古典への深い反省を示す曲が洋楽
系のベテラン作曲家によって次々に書か
れはじめてるのである。

「雲煙」は田中賢の作品で、沢井一恵
と福永千恵子によって演奏された。田中
の内部には日本の心の伝承と西欧体験と
のせめぎ合いがあり、それが形式と自由
反覆と飛躍といったさまざまな要素間の
葛藤と複合されて、事からいったん情緒
や想念をうばい、より個人的な心的告白
のかたちでそれらを再生している。田中
にとって筆は決してノヴェルティでなく、
肉化された楽器、自己の肉声としての楽
器として意識されているのではなからう
か。田中は邦楽器のためにしばしば作曲
をする人ではないが、それだけに一回限
りの肉声として筆を選んだ選択の重さは
極めて説得力がある。このように作曲家
の楽器を見る目に成熟度が出て来たのが
最近の傾向で、たとえば11月1日の鶴田

三千子のために書いた横笛独奏曲で、こ
の秋に発表された三橋貴風リサイタル
（10月30日）での尺八独奏曲「霜夜の砧」
と共に、柴田の邦楽器のための二大佳作
と言えよう。かずかずの前衛的な試みを
経て柴田は邦楽器のために非常にオーソ
ドックスで且つ形容の豊かな独白を書い
たわけで、そこには古典の精神へのはる
かな距離をへだてての接近が見られる。

梯子十七絃リサイタルは、そうした成熟した作曲家に委嘱した作品ばかりを実に

美しい音で弾いた見事な会であった。

上野 晃

例によって昨年末、年間の初演作品のデータを整理していたら、いわゆる現代邦楽のジャンルに属する新作が、百曲近くに達した。前年の八十余曲にも驚いたが、それを軽く突破する記録が生まれた。そのほとんどは委嘱作だが、自作自演という本来的な創造の営みもふえていた。

現代邦楽に手を染める作曲家たちが、特定限定化する傾向はまったく解消したわけでもないけれども、わずかずこの分野の創作に新しく参加する作曲家が増してきたように、さき行き明るく、ようやく昨今ほっとできる。

三木稔、牧野由多可、藤田正典、池辺晋一郎……など、すでに新邦楽の体験浅からぬ作曲家たちが、いっそう精力的に次々と新作を書きおろし、これとならんで伴谷晃二、新実徳英、永瀬博彦、内田とも子、中村滋延ら、新進鋭鋭の若手作曲家たちも、邦楽器へのアプローチに意欲を見せた。が、佐藤允彦「一水四見」(琵琶五面による)、神津善行「サカラメント」によるキシリタンの子守唄(尺八と箏の二重奏)、といったクラシック畑外から比較的天然な現代邦楽作品があらわれて、新風をもたせた。

佐藤作品は、薩摩琵琶を主力に、筑前

琵琶まで混成の合奏琵琶楽だが、鶴田錦史、半田淳子ら五人の琵琶は、それぞれが独奏楽器としてのまさしく個性的な琵琶でありつつ、多面的な空間性をトータルで生む。従来の打楽器的効用、さまざまな音色や間に加えて旋律的機能まで求めた最後のフーガ状の展開など、琵琶の器楽的な楽しさを新鮮にみらせる。FM放送で初演されたが、ステージでの視覚のおもしろさも期待できる。

池辺の「琉流累譜」(尺八三本、第二面、十七絃)は、放送初演後、ステージでも披露されたが、八邦楽4人の会が目標のせい、あらかじめ録音の二パートと共演する一人三役の尺八ソロ三重奏は、やはり放送の方が好ましい。できるだけ自然な状態にある邦楽器で絶対音楽を——という作曲者の意図は、極力飾りを排した尺八の動きに察知できるが、筆たちのオスティナートは、あまりに從的。補陀落度海という日本の信仰史のなかでも特異な題材を扱った石井真木の音響詩「熊野補陀落」は、邦楽器を用いていないが、竹本藏太夫の浄瑠璃が音色として、マリンバその他の打楽器と同在し、かつ物語をドラマティックに運ぶ。この石井独自のサウンド・プロジェクションに

対するのが、杉浦弘和の長唄「一休」かも知らない。西垣勇蔵ら十名の唄、杉浦ら六名の三味線、藤舎成敏ら八名の打楽器、といった大編成の布陣は、いささか過剰気味ながら、多彩な劇的演出とワイドな印象を残す。沖繩の作曲家、上地昇の「風のとむらい」(笛、胡弓、箏、十七絃、打楽器「三名」)は、旋法的な音楽

だが、音色にローカリティが強く染む。論評がほとんどない放送初演曲をあえてとりあげたが、リサイタルでは、沢井忠夫の事独奏による松村祐三「幻想曲」、三橋貴風の尺八独奏による柴田南雄「霧夜の砦」、西島昭子の三絃を中心とした佐藤聡明「究極の旅」など、とりわけ忘れ難い。

二十絃箏／文月の会／その二

第六回野坂恵子二十絃箏
エコー演奏会

○殊舞(委嘱・初演)／永瀬博彦 ○紡ぐ／池辺晋一郎 ○題未定(委嘱・初演)／牧野由多可 ○鶴／三木稔 ○三つのフェスタル・パレード／三木稔作曲・野坂恵子編曲
客演：坂田誠山 出演：野坂恵子・中丸春美・吉村七重・鐔本和子・滝田美智子・内藤洋子・蔵本エリ子・中野公子・熊木早苗
□日時 七月十七日(金)午後七時 □場所 青山タワールホール
□入場料 二〇〇〇円 □チケット取扱い 渋谷東急ブレイガイド・銀座鳩居堂・日本音楽サービス四〇九一五三七四 □お問い合わせ 野坂方四六三三三八二四 □主催 野坂恵子二十絃箏エコー

三人の十七絃奏者による演奏会

十七絃と絃楽器のための「三つの叙景」(改訂初演)／助川敏弥作曲
雨月譜(うげつふ)——尺八と十七絃のための／吉松隆作曲
三つの十七絃のための「卒塔婆小町」(委嘱・初演)／田中賢作曲
アラバスク——十七絃とバスクラリネット、コントラバス(舞台初演)／安達元彦作曲 三重奏曲(委嘱・初演)／佐藤敏直作曲
出演：菊地倭子・宮本幸子・沢井一恵 賛助出演：横山勝也他
□日時 五月十八日(月)午後七時 芝ABC会館ホール
□入場料 二〇〇〇円(全自由席)
□マネージメント：カメラータ・トウキョウ ○三三四〇五一六〇八一

二十絃箏



日本音楽集团推薦

琴光堂和楽器店

■東京都目黒区碑文谷2丁目19-15 TEL 03(792)8481

長沢勝俊 作曲

子供のための組曲

池田逸子

長沢勝俊の曲を聴くと、何かしら懐しく親しげな気分がこみあげてきて、心のなごむのを感じる。それはどこかで聴いたことがあるようでいて、日本の伝統音楽の具体的なモデルとは直接結びつかない。生の素材をそのまま用いるということもほとんどない。にもかかわらず彼の音楽が上述のような想いをかきたてるのはなぜだろうか。

△子供のための組曲△は一九六四年作曲、日本の楽器のための長沢の第三作で、その年十一月の、日本音楽集団第一回定期演奏会で初演された。この作品は、まだ日本の楽器の特性を深く知らないうちに、楽器の新鮮な魅力にとりつかれ、ただそれだけで書いてしまった、と作曲者自身よく語っているが、その点にこそこの曲を、長沢作品の、いわば原点と呼ぶ必然もあるのだ。この作品に彼の感性の、そして思想の率直な流露を聴きとることが、あの長沢作品の魅力の解明に通ずることはまちがいあるまい。

曲は五つの章から成る。楽器編成は、尺八、三絃、琵琶、第2、十七絃、打楽器2。聴いてまず感じるのは、曲全体のあたたかさ、各楽器が放つ独特な

魅力である。どの楽器も決して無理な競合をせず、互いにひきたてあいながら、所を得てあらわれる。この楽器たちの放つ魅力は、メロディーの、リズムの、ひびきの特性・魅力と緊密に絡みあっており、作品全体のフォルムやスタイルとも切り離せない。以下、各章ごとにみていこう。

第一章（軽やかにのびのびと）の魅力の中心の担い手は第2と十七絃である。その他の楽器は曲の流れにアクセントをつけ、それを多様化させる脇役として用いられ、その方法で各楽器の独特な魅力をも印象づける仕組みとなっている。

冒頭から軽快に掛け合う、テンポの速い楽しいリズムとメロディーがこの章の特色を端的にあらわす。メロディーは民謡音階が基調で、それに付加音がついたり、あるいは削られたりする。基調となる民謡音階はD音から始まる音階（譜例1）とA音から始まる音階（譜例2）で、その二つが共通のテトラコードA-C-Dを含むため、両者の転テトラコードはきわめてスムーズになされ、そこからメロディーの自然な流れが作り出さ

「新典音楽作品研究」新連載によせて
現代邦楽作品の作品研究を新しく連載することになりました。編集部としては大分以前からの念願でしたが、今、書いて下さる側と、読まれる側の機が熟し、ここに登場することになりました。

連載の仕方としては、当面、日本音楽集団の歴史を刻んだ重要な作品の中から、

れる。D主音の音階にE音が加わり、二調自然短音階のようにも思われるが、調性感は薄くなく、それが旋法的な扱いであることがわかる。A主音の音階の部分では、B音が加わるため、これがイ短調でないことは一目瞭然である。これらの音階がすばやい転換や重複を重ねつつ頂点に達すると、ここで初めて三本の尺八が登場し、章を閉じる。この尺八の扱いは実に新鮮で、心にくいばかりである。

この章はリズムの特色を生かす明かるいメロディーを全体の簡潔な構成、楽器の魅力を少しづつ聴かせて後の章に期待をつながせる効果的な使い方などによって書かれており、それが作品の序章としての魅力をもたらしつつある。

第二章（ゆったりとたたずむ感じ）は前章の終りをうけてうたわれる尺八三重奏で、そのメロディーとひびきの美しさは絶品である。冒頭10小節の主旋律（譜例3）は譜例1と同じ民謡音階であるが、下降半音階を使った対旋律（譜例4）を置くことで独特なひびきを生んでいる。中間部は同型旋律およびリズムの模倣・

大編成、ソロ又は小編成と組み合わせ、一曲ずつ毎回二曲取り上げてゆく予定です。そして、研究者の執筆と、作曲家、指揮者、演奏者の実体験をあわせ、作品のより深い理解へ導く読み物として、鑑賞や演奏のための手引きとしてお役に立つよう願っております。

反復による、三本ないし二本の尺八の絡み合いとそれによるクライマックスの形成で、そのあとふたたび冒頭メロディーの再現となる。

いささかのはっきりもない、すなおな抒情は、あの本曲の魅力とはまったく別の世界だが、聴く者の心にひたひたと語りかけて止まない。

第三章（遊戯風におどけて）はふたたび全楽器の編成である。ここでは第一章とちがって、すべての楽器がほぼ対等に並ぶ。特徴は、何となくボケた味わいの四拍子五拍子のリズムにあり、それが民謡のテトラコードと合わさって主要モティーフとなり（譜例5）、スケルツォ風の楽章を形成する。しかもそのテトラコードは、冒頭、三本の尺八によって提示されるという、これまた周知な計算である。

主要モティーフが、コンジャンクトさされるもうひとつ別のテトラコードを加えながら（譜例6）カノン風に受けつがれた後、琵琶がその第一変形をソロで奏し（譜例7）、次の段落へ移行する。そこ

指例1
 指例2
 指例3
 尺八
 指例4
 尺八
 指例5
 甲
 指例6
 指例7
 指例8
 甲
 甲II
 十七絃
 指例9
 指例10
 指例11

では三絃が主要モチーフを奏し、第七と十七絃はさらに別のモチーフ（第二変形）をカノン風に奏する（譜例8）。この第二変形は、第一段落の民謡のテトラコルドの二度下に付加した音から始まる律および都節のテトラコルドである（譜例9）。これが消えると、尺八三本が第三の変形モチーフによるメロディーを奏する（譜例10）。コードは木魚と木鉦による主要モチーフ・リズムの掛け合いにつづいて冒頭部分が再現、主要モチーフのトゥッティで終る。

第四章（しずかに子守唄風に）は主旋律を奏する琵琶の都びた味が魅力的だ。楽器は三絃と打楽器が除かれる。第七と十七絃のオスティナートにのって歌われる琵琶のメロディーは、二つの民謡のテトラコルドがD音でコンジャンクトされた音階で、第三章で使われたものと同形（譜例6）。尺八によって反復され、ややテンポの速い中間部に移ると、尺八三本が主旋律を二度高くしてユニゾンで奏する。テンポがもどり、ふたたび琵琶の子守唄。心休まる唄である。

第五章（激しく律動的に）はまた全楽器が勢揃い。前章で休んでいた打楽器と三絃がソロ的役割で活躍し、たくましく乱舞する躍動感がこの曲全体をしめくくる。

大太鼓が拍子を変え、リズムを変えながら次第にテンポをあげ、新たに加わった奏者との掛け合いが一気に高まると、三拍子・二拍子三拍子の力強いトゥッティにつづいて、縮太鼓、大太鼓、十七絃のオスティナートにのったたくましい三絃ソロが始まる。第一章冒頭と同じ民謡音階である。ふたたびトゥッティ（こんどは四拍子）につづく三絃ソロは、前のテトラコルドA-C-Dに都節のひびきが加えられる（譜例11）。三度目のトゥッティにつづく三絃ソロ部分では、伴奏部に琵琶が入る。大太鼓にのって尺八三本がゆったりしたテンポでメロディーを吹いた後、ふたたび最初のトゥッティにもどり、トゥッティとソロの交替をくり返し、大太鼓のトレモロで曲を閉じる。

以上みてきた特徴をまとめてみると、①メロディーの自然な流れ

メロディーは民謡音階を基調として書かれており、各音階中の共通音によって転テトラコルドがなされるため、無理なく自然に流れる。律も都節も用いられてはいるが、はっきりとした音階の形ではあまり出てこず、テトラコルドのまま用いられたり、旋法風になど、かなり自由に用いられる。特に都節は少ない。

②リズムの軽快さ・躍動感

一・三・五章にリズム主体の章が置かれ、そのテンポ感とともに、同型リズムの模倣・反復を中心とした、楽器間で掛け合うリズムの軽快さがこの曲全体を特徴づけている。しばしば入る変拍子はオスティナートの多用とコントラストをみ

せて、いっそう効果的である。

③ ひびきの明達さ

メロディーの構成音を主体とするひびきは、あくまでもどこかで明かい。フンサンブルの合理性を前面に押し出し、日本の楽器にそなわっている非合理的な側面は最少限におさえられる。暗い、屈折した心理をあらわすようなひびきは、この作品のどこにも聴くことはできない。

④ 楽器の扱い方の自然さ

楽器の特性をあまり知らずに書いた。とはいっても、どの楽器もまったく自然に生かされ、個性的な魅力を放っていることに驚かされる。楽器との率直でいっぴりの心を通い合いを大切に、その点での妥協を許さない。例えば、三絃にしても、その扱いは陽性で、常に速いテンポの楽章でたくましく扱われ、いわゆるお座敷情緒的な側面からは、まったく遠い。三絃がそなえている前者の性格が、作曲者の感性をくぐりぬけて自然に生かされている。尺八も、本曲より民謡尺八の感性に近い。

⑤ 各章の簡潔な構成と全体の統一性

各章の形式はA—B—Aの三部形式や変奏曲形式などが中心となった簡潔な構成で、たいへん把握しやすい。また曲首がほぼ全体にわたって、譜例1および6の二種の民謡音階のどちらかで書かれていたり、楽器の出入りが各章で連関づけられるなど、全体の統一感が強い。

*

△子供のための組曲Vは、作曲家が日本の楽器に托して歌った、失われゆく心のふるさとへの熱き想いであり、日本の子どもたちに捧げる讃歌である。長沢勝俊という劇団ブーケとの共同作業のことを思わずにはいられないが、そうしたことを含めて、このやさしく、楽しく、力強い作品は、日本の各地でたくましく生活している子どもたちへの飾りのないメッセージであり、また同時に、そうした子どもたちの明日を確信し、彼らに希望を托するおとなたちへの連帯のメッセージでもあるにちがいない。

作曲者の立場から

長沢勝俊

日本音楽団の事務所の近く、青山通りに出ようとする所に、童話屋という児童書専門店がある。この店の包装紙には小さなシールがはってある。そこには「ほんとの子どもと大きくなった子どものための本屋」というキャッチ・フレーズがささやかに書かれている。△子供のための組曲Vや組曲△人形風土記Vを聞いた私にとって、それはなんともすがすがしく心暖まる思いがした。

私が△子供のための組曲Vを聞いたのが十七年前のこと。今や家庭や街にはテレビや映画に音と映像が満ちあふれている。子供の心をしっかりとつかんではいけない作品をかくことは至難のわざといえよう。私は常に原点に立ち返り、感性

をよりとぎすまし技術をみがき、第二、第三の子供のための曲を書き続けていきたいと思っている。

指揮者の立場から

田村拓男

第一回定演で初演されて以来、海外公演・地方公演をはじめ集団の主要なコンサートには、先ずほとんどといっていいほど登場する代表作である。数多く行われる集団の学校公演、或は大学やアマチュアなど、集団以外の団体でも取上げられていくことを考えると、演奏回数の中で圧倒的に他を抜いている曲である。

毎年入団してくる研究団員の最初の教材に当てられるのもこの曲であり、アンサンブルを勉強する上で、必要な素材が豊富に盛り込まれている。第一章では気魄のある立上りと正確なテンポ感、リズム感が不可欠であり、I等とII等のかけ合いを有機的にし、十七絃を充分に躍動させたい。第二章は尺八の高音域が充分に出せる技術が必要であり、呼吸を揃えてレガートに歌わせたい。冒頭のリビートの部分は二度目は絶妙の最弱音を要求したい。第三章は冒頭の尺八と箏のピッチに細心の注意を払うこと。テーマにはそれぞれ表情をつけた。第四章はI等とII等で神妙のバックを奏き、琵琶にのびのびと歌わせること、中程の三拍子になる部分では、各声部の追っかけを立体的に出したい。最後の一言は呼吸を合わせ

て弱くおさめ、すぐアタッカで第五章の太鼓のソロにつなぐ。五章は三味線のソロと打楽器が華やかに活躍する楽章であり、無条件に楽しめる。いい演奏で終えた場合には、特に三味線と二人の打楽器奏者は立って拍手を受ける習慣になっている。この曲は、今後ますますいろいろなところで、多くの人達に演奏され、聴かれる機会が多くなるだろうと思われる。

※テトラコルド——とは、完全四度の音を持つ音列のこと。日本の伝統音楽においては、完全四度の間に一つしか中間音を持たないのが一般で、その中間音の位置によって、民謡・律・都節・琉球の四つのテトラコルドが区別される。

※串コンジャンクト——とは、二つのテトラコルドの接続の方法で、一つの絃音、すなわちテトラコルドの両端のどちらか一方の音を共通核音として接合する方法を言う。別の接続の方法に、二つのテトラコルドを二度間隔で並列するディスプレイメントの方法もある。

○参考書籍——スコア、各パート譜は集団事務局にてお預けしています。

○参考レコード——「組曲・人形風土記」△子供のための組曲「RC Aレコード J R Z / 二五三（一九七〇年演奏）」

三木稔作曲

天如

石田一志

三木稔が野坂恵子の委嘱で作曲した「天如」(一九六九)は、二十絃箏が制作されてから書かれた最初の独奏曲である。十三絃箏の表現能力の拡大を意図して新しく制作されたこの楽器の能力を実証し、又、フレッシュな音楽的生命を吹き込むという重大な役割を担って書き下ろされた作品なのである。当然作曲者の気合いもすさまじく、たとえば、第一章で十六分(つづいて書かれた八佐保の曲)と八佐保の曲の約二倍という異例の長大さにも、あるいは「天如」は八天空、八如は理性、すなわち、自然の摂理を意味するという極限のタイトルに挑んだ」という命名にもその意気込みが端的にあらわれているといえよう。

本稿は、この記念碑的作品「天如」についての分析ノートであるが、古典箏曲たとえば八六段等についてさえ、分析法自体が現に様々な試行がなされている段階であるから、「天如」のような新しい作品についてどのような角度からメスをふるえばいいのか、正直のところまったく心もとないまま記したものである。大方の叱正をお願いしたい。

さてこの「天如」だが、前述したように単一章十六分という大規模な作品である。この規模は恐らく、二十絃箏の拡大された表現能力の披露を創作意図の第一義に置いた結果であろうと思われる。その「天如」の曲や八佐保の曲が、そうした能力を前提にしながらも、「春の女神」「秋の女神」を意味するそれらのタイトルのように、音楽にはある一定のイメージへの注視から作られたミクロコスモスであるに対して、「天如」は、何もかものみ込んでしまっている「天」であり、「自然」であり、そうした雄大さをもったマクロコスモスの表現なのである。八天如が音楽的に豊饒であることは、改めていうまでもなく聴手には自明なことである。問題なのは、この豊饒や自然な雄大さが、実践的な作曲の上では具体的にどのように達成されているか。また、そうした豊饒な内容が、一個の作品としていかなるまとまりが与えられているかである。それはスコアの考察ではじめて説明できることなのである。

まず調絃からみていこう。「天如」は譜例1のように、曲頭では長短二度三度

を様々な組み合わせで盛り込んだ、音程の種類の多彩な調絃が指定されている。

のちの八佐保の曲(短二度と長三度のシステマチックな調絃)や八竜田の曲(長短二度の交互配列が短三度で結合されている)と比べると、この調絃はむしろ一定の音組織の存在が認識され得ないように工夫されているとさえいえる。しかも、曲頭の調絃は八佐保の曲のように固執されることなく、曲中に色々移動される。「天如」の調絃にみられる、音程の多彩さと可能性は、作曲者にとってこの調絃がいわゆる「静的」な自己管理的なものとして設定されたのではなく、「動的」な自己開放的なものであり表現の足場であり、表現のためには動かし得る足場であったことを物語っている。またこの調絃で面白いのは、一絃から八絃までのオクターブ、七絃から十四絃までのオクターブが、半音進行を除けば各々ペンタトニックを形成することである。この隠されたペンタトニックの存在は、表面的にはダイアトニックといえる長三和音(14、15、18絃)ドミナント進行の完全四、五度音程、導音進行をなす短二度音程、更に近代現代音楽で好んで使用される減三和音(18、19、20絃)の西洋的響気を示した調絃の特徴と合わせてみると、作者が、この作品でペンタトニックに調絃される十三絃の音楽的世界を内に蔵し、しかも西洋的近代を充分に意識した音楽を書こうとしたことが推察で

きよう。

調絃と関係深い中心音の問題をみれば、「天如」はト音で開始しハ音で終結する潜在的には大きなドミナント進行を持つ、ハ調の曲といえる。といってももちろん機能と声的な音楽ではなく、むしろ音程の緊張の度合が各楽想の連結に巧みに生かされている。そして各楽想は、たとえば曲頭のような日本的な音と間の関係、或いは一音の吟味、充足。あちこちに点在する現代音楽的なグリッサンドやクラスタといったサウンドに関わったもの。それにたとえば練習番号(四四)のような、いわば従来のトッカータ的といえるメカニカルな運動や即興的な自由な動きと静かな和音の動きの対照などから発想されている。

楽曲構成については、スコアの序文に作者自身が「永遠のフォルム」というベキ三分形式に到達したが、再現された主題部分が八段物(変奏)の始まりにあたる構成になっている」と記している。美学的にいうと、形式には原理的には二様あって、内から漸次形成されていった結果生じた形式と、最初から設けられて出来ている形式があるとされているが、作曲者のコメントによれば、この「天如」は前者の形式的形式の作品というらしい。実際にスコアを見ると、いわゆる図式的なABCとかABAといった三分形式を成していないことがわかる。練習番

＜天如＞出題当時の
記号表記例1
調性

二十弦



例2

②



例3

スコア 1
4段目

①



②



③



④



⑤



m = 四 ト = 完全 a = 増 d = 減

以下略

●印の音符は、曲頭での調性。

●印の音符は、曲の途中で事象を動かす印。

●最近の二十弦等の記号は、十三弦との共通性を持たせるため、三木製作品に対して上記（上段）のように書くと表記され、奏者間でも統一した方法になっているが、作品一号の＜天如＞の項はまだ電報がなく上記（下段）のように一〜20と表記されていた。

号図は、曲頭（練習番号①に入るまで）の移調された文字通りの再現であるので、第三部がここから開始することは明らかだが、通常第一部と楽想的な対照をなす

第二部の開始は、どこからかはそう図式的に明らかではない。スコアでは、練習番号⑤の終りに複雑線があるから、このあとが第二部らしいが、実際には、この⑤の楽想は独立性の強いもので、しかも、この⑤に入る前にフェルマータがあつて（⑤の終りにはない）、段落を作っているのである。この複雑線が存在をスコアの上で見なければ、つまり演奏を聴いていなければ、むしろ⑤の頭からが第二部のように見えたりもする。加えて、複雑線後の⑥の内容は、第一部②で提示され、都合四回にわたってくりかえされ、定着された単旋律（譜例2）が、重音（合わせ爪）の伴奏を伴って再出したものである。つまり第一部と極めて密接な関係があるわけで、楽想的には対照性よりもその連続性が意識されてしまうのである。だが、連続性といっても、この再出旋律

に掛けられた「ユリ」、又、重音の「打爪」「ちらし爪」の音色変化、更にはその後登場する各種のピッチカートやグリッサンドといった奏法やアタックの特色は、第一部ではほとんどなかったものである。だからこの演奏技巧的な点では第一部と第二部は対照を成しているといえるのである。この再出旋律以外にも、あとで指摘するように、第二部で印象的にあらわれる音型のほとんどは、第一部で提示された基本的音群動機にもとづいている。その意味ではこの第二部は、第一部と動機・素材的には有機的な脈絡をもち、むしろ第一部で提示された素材を名人芸的演奏技巧との関係の上で新たに組み合せ外放的に展開していった部分といつてよいだろう。この「展開的」第二部に対し、第三部は、作者のいうように八段物Vの変奏であつて、ある意味では内省

的で静観的な第一部への再考察が内容となつてゐる。そしてこの第三部では、先に触れた終止音であるハ音の確立に深い考慮がはられてゐる。だから八天如Vは三分形式といつても、楽想の素材面から見れば、Aに対するはつきりしたBやCはなく強いといえば、A・A'・A'になつていて、むしろ気分と寒気の上で、静動の三分を成していることになる。作者がコメントにいう三分形式の「永遠性」とは、こうした一貫性の内で形成される起伏、いわばすそ野へという自然さのもつ「永遠性」のことと了解できるのである。そしてこの自然な起伏は、各部の内部でも周到に用意されていて、音楽に一層の自然の息づきを与えることになつてゐる。それは、音楽的語り口の旨さともいふことにでもなるのだろうか、この自然の息づきが充分推察された作曲の結果であることは、記譜の上での、音量やアゴギックだけでなくN・R（竜角近くの硬い音色）、off R（竜角から離れたの柔らかな音色）のような音色変化の刻明な指示や長短各種のフェルマータ記号による「間」の指示をもっていることとわかる。このような、アゴギックや音色、間の記譜は、西洋系の現代音楽のなかでも、用いられてはいるが、段階的な変化よりも、漸次的な変化を指定していることが多いのは、ひとつには日本的といえる審美観、ひとつにはそうした漸次的変化がすべてにわたって可能な事とい

う楽器の特性を意識してのことと考えてよいだろう。ただし、これらの指示は、△佐保の曲▽や△竜田の曲▽では、全面的にないしは大部分、演奏者の解釈に委ねられることになった。

ところで、この構造区分の上で、最初、困惑したところがあった。例の第一部、第二部の境界線上に置かれた独立的性格の図の内容である。この部分は六音からなる和音が連続する唯一コードルな書法がとられている。この六音和音の平行進行は、奇数絃（三・五・七・九・十一・十三から）と偶数絃（四・六・八・十・十二・十四から）の交代で進むもので、その上行の頂点には20絃目が含まれた和音が鳴り、その和音連結の合いの手に一・二絃の重音が入る。簡単にいえばここでは、二十絃等のすべての絃が鳴るわけである。私見によれば、この図は十三絃等にはない音域の広さを二十絃が有していること、それでいてクロマティック、ないしはダイアトニックな西洋楽器では作れない、単独自の調絃の面白さ、つまり、奏者の一定の手の動きが作りだす予想外の不規則な平行進行和音自体の音楽性を、第一部の終りで開示したものだと思う。図は動機的・書法的には独立性が強いが、第二部の名人芸的奏法を盛り込む展開部の前に、それとなく、この楽器のもつ能力と魅力の一端を十三絃とも西洋楽器ともちがうというところで提示し、図以下の技巧的展開の前提にしたと解釈できると思

うのである。

スコアを読んで気付いた、作曲技術の工夫のあとには、まだまだ色々あるが、紙面に限りがあるので、最後に、全曲をつらぬく基本的な音程動機について触れておこう。この作品の場合、調校の項で述べたように新旧・東西の要素が音律的に盛り込まれているので、音程動機の徹底といっても、決して排他的にそれだけが使われているわけではない。そうした多様性のなかでのことなのだが、特に重要と思われるのは、短二（長七）度と完全四（五）度の組み合わせ、及び増四（減五）度の読みかえれば三種の音程である。完全四度が各種日本旋法で共通する核音関係であり、短二、増四度が西洋近現代音楽の特徴とすれば、音律だけでなく、音進行の上でも新旧・東西の音楽的特色のエッセンスが盛られているということになる（譜例3）。

楽文中の弦番号は楽譜出版当時の表記。最近の表記については諸例1参照。

作曲者の立場から

三木
稔

△天如△を書いた一九六九年は、私にとって充実した創作の年であった。前年末からの△箏譜詩集第一集△が仕上り、△曲△△風のうた△などの小品を書いたのがその春だったが、アポロ十一号が月面に降り立った七月二十一日は△マリリンバ協奏曲△完成の日だった。そして、夏

から秋にかけては、二十絃箏独奏曲・合奏曲それぞれの第二号作品となる「天如」[△]と「序の曲」[△]に没頭していた。

しかし、当時苛酷だった創造の日々の記録を、以後の私は、何度も何度も自分で超えねばならなかった。二十結争の始まりだけでなく、そういった意味でも、**△天如△**は「私の中の新典」としての重みをエトス化して在る。

△天如▽では、考えられる筆の特質の
開発に努めたが、それらが技術のための
技術として顯示されることのないよう、
全曲の構想の中で自然の理に叶ったもの
として生きていることを願いつつ書いた。

集団での公演に加え易いよう短縮版も考えたが、原型の△天如▽を愛した米人クルーガー氏から「これは完全なフォルムであり、短縮版は許せない」という嬉しい忠告を受けて以来取り止めた。

そのような評価も、すでに行われた十六回の機会に、常に新鮮な感動に満ちた演奏を示してくれた初演者に強く負うものである。

演奏者の立場から

野坂惠子

二十絃箏が得た初めての独奏曲です。タイトルに示されるスケールの大きさ、十六分間切れ目なしの演奏も必要とする息の長さ、それでいて微妙な音色の変化や手法にも気が配られている名品だと思います。

8音のオクターブの音がひそやかに息づく形で始まりますが、冒頭の部分はディナミクも音色も間も奏者の自由な選択にまかされています。拍子やテンポという規定の枠にとらわれない自由さが私には大きな魅力です。古典曲に相通じ、しかもそれを乗り越えようとする気迫を感じます。そしてそれは果たされたと思います。

今後はどうなるか判らない新楽器で、
口を書くに当り、作家が筆の最も生きる
方法、そして伝統の上に立ちそこから未
来に向かう形をとられたことは二十絃箏
にとって幸せなことでした。

ゆつたりと動く前半、そして激しいアレグロの持続を経て段物を頭において書かれたヴァリエーションともいえる後半、これらに全力投球をした後のコードの部分は、私の一番好きなところですよ。大きい緊張を持って今までの断片が現われ、そして充分な間を保ちながらC音へと集約していきます。それは大仕事を成し終えた後の解放感にも似てすがすがしいものです。大空に浮かぶ美しい雲のたどるのにも思われます。それだけこの曲が燃焼しつくせるものだからに他なりません。

○参考出版書籍——「天如・佐保の曲・竜田の曲」全音楽譜刊現代邦楽ライブラリー⑬（一九七五年発売）

○参考レコード——「日本音楽集団による三木 稔の音楽」日本コロムビアIX/21及びGZ/七〇〇五(一九七〇年演奏)「野坂忠子・三木 稔/二十数年の世界」カメリアCT/一〇一八(一九七三年演奏)演奏はどちらも野坂忠子

26号発売中!

季刊邦楽

B5版
1200円

(○は売り切れ)



- 1号 宮城道雄のすべて
- 2号 三味線今・昔／日本音楽の今日明日
- 3号 続三味線今・昔
- 4号 (明・大・昭) 邦楽裏面史
- 5号 尺八の魅惑
- 6号 琴と箏
- 7号 三番叟／沖縄の旅
- 8号 芸談／学校教育にみる日本音楽
- 9号 箏／越後獅子
- 10号 尺八／五段砧
- 11号 民謡を考える
- 12号 邦楽界の戦前戦後／越天楽
- 13号 中学校の音楽教育／君が代
- 14号 勸進帳／芸術祭
- 15号 六段／邦楽家死の謎
- 16号 現代邦楽／箏の絃
- 17号 道成寺／邦楽放送
- 18号 弁慶／発掘された華
- 19号 山姥／幻の八十絃
- 20号 みだれ／邦楽雑誌史
[季刊邦楽総目録]
- 21号 すががき／懸賞論文「邦楽の発展は」
- 22号 小町／箏新教育法
- 23号 さらし
- 24号 虫の音と虫の手
- 25号 松竹梅／聴衆の拍手の問題

26号1981年春——発売中!

名曲のルーツ(10) 砧もの

55年度芸術祭／邦楽界総決算／10大ニュース

TEL 03-591-7271~3
〒105 東京都港区虎ノ門1-19-14

(1号より) 定価 800円
(11号より) 定価 980円
(26号より) 定価 1200円
送料 250円
年間購読料(送料共)5800円

株式会社 邦楽社

新譜・新刊案内

レコード

□三木稔選集 Vol.2

「巨火」「わ



「巨火」(ほて)とは、作曲者三木稔のイメージの中で、盆の送りの野火手(のぼて)が燃え上がり、巨大な祭りの焰となったもの。日本音楽集団のもっとも大きな編成に託された「巨火」は、このレコードでは、井上道義の指揮により、いっ

そう明るく軽やかにもえ上がっている。編成は、笛(能管と篠笛)2、尺八6、三味線(太神と細神)2、琵琶2、胡弓1、二十絃第2、十三絃第2、十七絃第2、打楽器4(うち1つを指揮者が受け持っている)。

曲は、いくらか宗教的な導入の部分、中間の各楽器の独奏部分、そして秩父屋台囃子のリズムによる圧倒的な盛り上がり部分の三部からなっている。

筆者はこの録音の行なわれたときの生(ナマ)のコンサートを見ていたが、そのときはやはり、祭りが最高潮になったときの会場の印象がのこったが、レコードでは、細部にも耳がゆき届く。野坂恵子の二十絃等もそうだが、胡弓なども意外に強く訴えてくるのに驚いた。

「わ」は、尺八、三味線、琵琶、二十絃等、十七絃等、打楽器各1の合奏曲。各パートに日本音楽集団のエースを揃えて充実した演奏をきかせる。

打楽器には、集団特有の楽器びんざさや、かねも入っており、このレコード全体に打楽器のおもしろさがよく味わえることにも気づいた。それは、録音が、日本の楽器全体の特徴ともいえる打楽器音の比重の大きさをはじめから十分考慮、計算の上、よく生かしたものにしているからなのだろう。私にはそれがありがた

井上道義指揮 日本音楽集団演奏
カメラータ・レコード/CMT1041
定価二五〇〇円 (小宮多美江)

□レコード「夢模様」と、発売記念コンサート



打楽器に興味のある人はもちろん、ポピュラーファンには、きつと楽しんで頂けると思うレコード「夢模様」が三月五日新

発売された。このレコードは、話題の、ぐるーぶ・だだの第二弾で、日本の伝統楽器とエレキ楽器の融合により、一味違った独自のサウンドを作りあげている。作曲・編曲は、グイヴァルディの四季やモーツァルトのセレナーデを導くために編曲されているお馴染みの角田圭伊悟が

あたっている。(夢模様 東芝EMI E T J 8 5 0 1 1 祭り・手鼓舞・囃気楼・調べ・曙光・荒行・乱気流・歌拍子・夢・陽光)二五〇〇円

このレコードの発売記念コンサートが、三月七日駒場エミナースで開かれた。シンセサイザーやエレキミュージックに耳慣れた若者たちも、鼓や太鼓、笛や鈴の音に新鮮な驚きと感動を覚えたであろう。一部はシリアスなプログラムで、三木稔作曲(八幡)と西川浩平作曲初演の八茶々Vが――八歌袋Vに続く二作目で、さ

さらのかけ合いが妙味。二部の最初の曲は、リラックしたムードで、華やいだ八祭りVから。篠笛のソロがサンバ調のリズムを奏でたり、鼓が手鼓のはずむ様子を表現しているところは、こんなに日本の打楽器は明るく響くものであったかと思えるほど陽気な気分になさせてくれる。きつとそれは、ドラムスやエレキとの共演だからこそ表現できたのではないだろうか。コンサートの最終曲目八荒行Vはドラムと能管のかけ合いが緊張感を増し、邦楽打楽器群の連打は迫力のあるものであった。

「ただ」結成以来三回のコンサートをもったわけであるが、古典から現代・ポピュラーと幅広く企画が考えられており、今後の活躍が楽しみである。メンバー：尾崎太一・藤倉成敏・堅田啓輝・打楽器―尾崎太一・藤倉成敏・堅田啓輝・高橋明邦・黒坂昇 (鶴野和子)

ほうげん抄

昭和五十五年度において、日本音楽集団が演奏した回数数は百四十回で、そのうちの六十六回が学校公演であった。

数多いコンサートのうちには、様々な話題がある。今回は学校公演の中からいくつか話題を拾ってみよう。

◇ 八月末、長野県飯山地区において小・中学生を対象に十二回のステージをもった。

集団の音楽を殊のほかお気に召した校長会の先生方は、町一番の料亭にメンバーを招いてくれた。芸者をお呼びの接待で、三味線や太鼓でお賑やかなお座敷だったが、弾いたのは集団のメンバーで、「うまいもんだ」と手を叩いて喜んだのは芸者さん達だった。

◇ 十一月には栃木県内で、やはり小・中学生を対象にした公演が二十九回あった。

随分山奥まで行った。一学年一学校の小学校では、冷え冷えした講堂に、小さな手の大きな暖かい拍手が鳴り響いた。大太鼓を運ぶのを手伝ってくれた三年生のガキ

ほうげん抄 邦(楽)現(代)抄 放言抄 方言抄 ほうげん抄 邦(楽)現(代)抄 放言抄 方言抄 ほうげん抄

【楽しい練習曲集「事と尺八」(中級編)】

作曲と編曲・長沢勝俊



「楽しい練習曲集」(初級編)の方は五年ほど前から出ており、この中級編は

それにづくもので、同じスタッフ(宮田耕八朗・長沢勝俊)により同じスタイルで編集されている。

曲目は、第一部は「キラキラ星」(モーツァルト)にはじまり、童謡や日本の愛唱歌、民謡などが、対象の多様性を想定して組合わされている。第二部は初級編につづく長沢勝俊作曲の練習曲12(19番)。

箏や尺八を習う場合、ピアノの教則本のようなものがととのっていないことがよく指摘される。しかし、大人がはじめる場合などには、無味乾燥な練習曲を数多くやるよりは、耳で知っている曲から入って、その都度必要な技法をマスターしていくのも決して悪いことではない。

この曲集の解説は、第二部は作曲者自身、第一部は宮田耕八朗によって、各パートについて細かい指示がなされている。その指示は、この譜がすでにじっさいに演奏され試された上でのものなので、親切さがゆきとどいている。

たとえば、ききおぼえている曲とのち

がいに注意したり(「トロイカ」)、またタンギングを使わないと音から音へ移るときに、日本音楽には特有のポルタメントが付きやすいということ(「キラキラ星」)など、ちょっとしたところで大切な指摘がある。十分注意して生かすといえる。

箏か尺八をそれぞれ一人でやっていたも、合奏ははじめてという人もたいへん多いはずだが、そういう人にも、相手をみつめてぜひこころみてみることをすすみたい。合わせることを通じて自分以外の音楽をきくことや、思わぬよるこびがあるはずだし、自分自身の表現の幅もひろがるだろうからである。また、組み合わせ方では、この曲集で小さなコンサートもひけるはず、そんな楽しみも期待される。定価七〇〇円

なお、この曲集も初級編と同じく、すでにレコードが発売されている。

「事と尺八(中級編)」ビクターS・JL 178 定価二〇〇円

団員、及び団員関係のグループの動向

□あだだ 米初演、全公演全席売切れ
七十九年十月、ロンドンで世界初演された三木隆のオペラ第二作「あだだ」(Lol's Revenge)は、ヴェーバーの「ハオベロン」以来百五十二年振りにイギリス

のオペラ界が外国人作曲家に委嘱した作品であった。そして、上演したあとでは、この二十五年間ロンドンでの最高のオペラ、とか、こんな立派な仕事をしたイングリッシュ・ミニ・ジャック・シアターへの助成を切るならば、アーツ・カウンシルは一しよに死ぬべきだ、と大新聞が書くなど、大きな反響を起した(本誌第九号「歌楽帖5」参照)が、その米初演がいよいよ近づいている。

初演と同じコリン・グレアムの演出により、六月十一、十三、十七、十九日の四夜、セントルイス・オペラ劇場がニューヨークのキャストによって上演をするもので、作曲者三木は今回は指揮を依頼され、二十絃の野坂恵子は三味線も弾くことになり(代りにハーブがオケ・ボックスに加わる)、それに前同様に、鼓で高橋明邦、振付に花柳錦之輔が参加する。渡航費なども先方持ちだし、ギヤラもちゃんとしている。三木は頭を抱える必要もなく、その自分の作品の指揮者としての勉強に専らと喜んでい

初演指揮のステュアート・ベドフォードから「アメリカの歌手は、イギリス以上にちゃんとしている」と聞かされて、氣持をひきしめている三木は、劇場から「売行きはextremely well」、つづいて「四公演ともsold out」と連絡を受けて縁故で上演を聞きに行く人たちの切符確保にあわてている始末。欧米では、出演者の手売りはなく、一切劇場で買うが、

大將は、次の会場へ向って走り出した車の窓に、「オメエら、うめエナ」と叫んだ。

七月初め、山形県米沢市で高校生対象に七回の公演を行った。市民文化会館で四日間、移動がないのは本当に楽だ。毎朝、ホテルから衣類を付けて歩いて出勤した。メンバーの中にこの町と同名の尺八がいて、紹介すると大きな拍手がきた。彼は十一月に職場結婚した。この号の出る五月の何週目かの金曜日に、ふたりの演奏によるハキビタキの森(宮田耕八朗作曲)がNHK・FM「今日の邦楽」で放送される。

ちなみに、夫婦で団に所属するものが四組、兄弟が二組いる。そのうち親子の団員が誕生するかもしれない。

足立区のある中学校で演奏した時のこと。

一曲目は「子供のための組曲」(長沢勝俊作曲)だった。この曲の五章では大太鼓が活躍するが、変拍子もあって結構むずかしい。二人の奏者のうち一人は女性だったが、この人演奏が終わって舞台の袖に引き上げて来たたん、お腹をおさえてしゃがみ込み「子供が

第六回日本音楽集団第五回作曲公募の結果報告

今回で作曲公募は六回を数えました。
審査には柴田南雄氏と日本音楽集団であ
たりましたが、全員一致で新実徳英氏の
「新実徳英」が日本音楽集団作曲賞となり、佳
作に橋本信氏の「ETAMINE」が推され
て、今後の研鑽を期待されました。

次に柴田氏に伺った評と、受賞者の紹
介を記しておきます。

「新実徳英」は、一回目にすーっ
と目を通した時、ほとんど抵抗なく、流
れるように読み進めることができた。も
ちろん、それだけでは秀作の証明にはな
らず、無内容な曲でも似た状況を醸成す
るが、この作品はそうではなく、むしろ、
視点の置き方によっては、読みながら洪
滞を覚え、小返しを繰り返しながら先へ
進まざるを得ない内容と密度と構成の工
夫がある。それにも拘らず、あるがまま
に鳴る音を想像しながら読み進めること
も可能であることが、この作品を第一位
に推す理由である。

橋本信「ETAMINE」は「いかに」
という点ではともかく、「何を」に物足
りないものを感じた。他の作品ではその
両方に未だしの感が残った。

日本音楽集団の作品募集は、集団と毎
回異なる外部の審査員の協議という点に
特徴があることは今さらいうまでもない。
だから、応募者の皆さんは、集団の活動
の性格と、その回の審査員の音楽観や作

品をよく知って応募されることが望まし
い。漫然と習作を提出するのは無意味で
ある。「下手な鉄砲も数打ちゃ当たる」
というのは、どの作曲コンクールであれ、
通用することではない。」

□第一位 日本音楽集団作曲賞
新実徳英作曲「纏」

新実氏は一九四七年名古屋生まれ。東
京大学機械工学科卒。七五年東京芸術大

次回「実験作品アンデパンダン」参加のすすめ

日本音楽集団の作曲公募は六回を数え、
入賞作の中には力作も多く、今後も公募
は続けていきたいと思っておりますが、次
の第七回は少し趣向を変えて邦楽器のた
めの「実験作品アンデパンダン」をや
ります。以前から、いつかやらねばと考
えていたのですが、世の中が保守化し、思
い切った進歩的な実験が極めてやりにく
い現状ですから、今こそそれを実現すべ
き時だと考えます。

日本音楽集団はその編成に各種の邦楽
器を含み、しかも若い奏者や若い気持の
演奏者が沢山います。どうか作品といっ
た堅苦しい前提を捨てて楽しいアイデア
で夢を膨らませて下さい。結果として立派な
音楽作品となることはけっこうなこと
ですが、今回はあくまでも実験を前提に

学音楽学部作曲科卒、七八年同大学院卒。
三善見氏他に師事。現在桐朋学園大学音
楽学部、同短期大学部講師、武蔵野短期
大学講師。主要作品——「For Mainbois」
「I・II・ENAGAGE I・II」第三重奏曲・
「Preliminary」二面の筆のために、混声
合唱組曲「幼年連綿」

□佳作 橋本信作曲「ETAMINE」
橋本氏は一九五〇年生まれ、尚美高等
音楽学院研究科卒。三善見氏に師事。

募して下さい。第一線で活躍中の作曲家
の方々も気楽にどうぞでしょうか。

日本音楽集団側としても、手持ちの全
ての楽器について、個々の楽器でも合奏
の形でも、どんな試みにも、どんな記譜
方法にでも挑戦してみたいと思います。も
ちろん、伝統的な記譜方法によりながら
あるいはごく日常的な楽音を使っても、
内容はこれぞ実験と主張なさるものも当
然あるでしょう。

手や声による発音方法をこえて、電気
的操作を必要とする場合、演奏のときに
提出者がその電気機器を持ち込んで下さ
ればOKです。

アンデパンダンというからには、でき
るだけ全部音にします。あまり無意味な
ものとか、一コンサートの分量を越える

場合は、公正な立場の多くの識者に諮っ
て選ぶつもりですが、最善をつくして提
出者の実験意図の公開を考えます。

募集締切は例年のように十二月十五日
で、スコア及び各楽器の奏者が直接使用
できる楽譜の両方を日本音楽集団事務所
に届けて下さい。簡単な経歴を添えるこ
とを忘れず。

八二年三、四月頃に、提出作の公開オ
ーディションを行います。集まった内容
に相応しいパーフォーマンスを行いたい
と思います。入選作の審査は、その折に
ご来場の、①専門作曲家、評論家、演奏
家の投票 ②一般聴衆の投票 ③日本音
楽集団団員の投票、に各三分の一ずつの
重みを持たせ、その集計によりたいと考
えています。

こういった試みですから、意図を音に
してみるということに全力を挙げますの
で、とりあえずは賞金や一般コンサート
での上演のことについては白紙で臨みま
す。投票の中に賞金や以後の上演が必要
との声が多かった場合には、例年になら
って考えたいと思います。もちろん、参
加作品の全ての権利は作曲者に帰属しま
す。

以上の趣旨をご理解頂き、楽しくご参
加頂くことを期待しています。

日本音楽集団
実験作品アンデパンダン責任者

三木 隆

第3回日本音楽協会スナップから



協合奏団「鼎」の
リハーサル風景



後で行われた
交歓パーティー



協合奏団「たあく」の
演奏風景

第四回日本音楽協会フェスティバル開催

全国からアマチュア六グループ参加

このフェスティバルも今年で四回目を数えます。全国の現代邦楽の合奏団が一室に会して互いに演奏し合い、交流を深めようというもので、毎回遠隔の地からも何グループが参加し、熱気に包まれた楽屋、舞台、客席で盛んに交歓が行われています。これまでの四回は全部東京を会場にしましたが、次からは、東京以外の都市でも行おうという意見も出ています。

今回は初の試みとして、参加合奏団の合同メンバーによる演奏も行います。参加団体、演奏曲目は次の通りです。

- 日時 一九八一年六月六日(土) 午後三時半開演(予定)
- 会場 都立勤労福祉会館(東京・八丁堀)
- 参加団体と曲目

日本音楽協会合奏団

星組(東京) 四季—ダンス・コンセルタントI/三木稔作曲

たあく(東京) みち/長沢勝俊作曲

鼎(大阪) 藤春/青山政雄作曲

游(仙台) 松よ/三木作曲

みずほ(名古屋) デイヴ・エルティメントよりI、皿葉章/佐藤敏直作曲

協合奏団有志 ファントスマゴリア/長沢作曲

若木(国学院大学尺八と箏の会有志及びOB) デイヴ・エルティメント/佐藤作曲

特別出演 日本音楽集団(曲目未定)

日本音楽協会合奏団—日本の楽器を演奏するアマチュアの方々へ

毎週一回集まって邦楽器による合奏を楽しむアマチュアのグループです。もちろん流派などは問わず、どなたでも参加できます。次のように、現在全国で五つ、海外に一つあります。(東京の方は友の会A会員に同時入会になります。A会員について詳しくは21ページ参照)

東京—毎週土曜日には三十余名の方が午後四時から六時まで(星組合奏団)、金曜日には二十数名の方が午後六時半から八時半まで(合奏団たあく)、合奏を楽しんでいます。ご希望の方は集団事務局へお問い合わせ下さい。

関西—関西方面では合奏団「鼎」(かなえ)が、三十余名の会員を有し活躍しています。練習日は毎週日曜日一時から五時、詳細は大崎じゅん〇七七四九一四一三〇三四までお問い合わせ下さい。

名古屋—名古屋はグループ「みずほ」。一昨年十一月に約二十名で結成されました。メンバーは愛知、三重、岐阜と広範囲にわたっているそうです。練習日は毎月第一、三火曜日六時半から八時半、他に月二回日曜日、詳細は水野正徳〇五六八一三二二七七五(夜)まで。

仙台—一昨年九月に結成、メンバーは十八名。仙台の合奏団「游」の練習日は毎週土、日曜日。詳細は山本昌子六二一九一四〇まで。

ハワイ—一昨年夏に集団がハワイ公演を行ったのがきっかけで、ハワイ大学の学生中心にメンバー十名余りで九月に結成。—Nipponia Hawaii Ensemble

日本音楽集団及び団員等に関する今後の予定(現在決まっている九月までのもの、

太字は集団主催。録音や学校公演などは省略します。)

五月十八日(月)

三人の十七絃奏者による演奏会(P.31)芝ABC会館ホール

三十(土)、三十一日(日) 現代胡弓研究会第二回公開講座(畦地慶司指導による)(P.42) 東京都武蔵野青年の家

六月六日(土)

第四回日本音楽協会フェスティバル(P.44)

十一、十三、十七、十九日 三木稔作曲オペラ「あだん」An Actor's Revenge

アメリカ初演 セントルイス・オペラ劇場(P.41)

十二日(金) 第六十五回定期演奏会——外国人による作品特集その一

構成・三橋貴風(P.20) 青山タワー・ホール

十三日(土) 尺八ソリストテンが「ニュー・クオリティ・サウンド/ポップ・クラシックのタベ」に出演

野坂恵子第二回ニュー・リサイタル

十九日(土) カートネギー・リサイタル・ホール

(二十六日にはシカゴでリサイタル)

七月二日(木) 栃木/文化会館小ホール、八月二十六日(水)、二十八日(金) 青森三カ

所、九月十七日(木) 徳島/会場未定、十八日(金) 高知/

県民文化ホール——以上六カ所で野坂恵子リサイタル

第六十六回定期演奏会——語りと音楽特集その四

構成・長沢勝俊(P.20) 青山タワー・ホール

十七日(金) 第六回野坂恵子二十絃箏エコー演奏会「文月の会」2

(P.31) 青山タワー・ホール

二十七日(月) 坂田誠山尺八リサイタル(P.45) 広島・エリザベト音大ホール

八月一日(土)、四日(火) 第十一回日本音楽集団夏のアカデミー・西の部

(P.15) 岡山厚生年金休暇センター

七日(金)、十日(月) 第十一回日本音楽集団夏のアカデミー・東の部

(P.15) 北軽井沢ミニジャック・ホール

九月二日(水) 福岡にて野坂と九州交響楽団が「破の曲」(三木作曲)を

共演 指揮・デニツケ サン・パレス(新設)

四日(金) 日本音楽集団演奏会 新潟市音楽文化会館

二十七日(日) 半田淳子と赤尾三千子によるジョイント・コンサート(民

音主催)

読売ホール

なお、楽団の一九八一年度後期の主な予定は次の通りです。

九月二十八日(月) 第六十七回秋の総合定期演奏会——長沢作曲の新作、三木

作曲の「ハタロウ」他 合唱・NHK児童合唱団

指揮・荒谷俊治 新宿文化センター

十月二十三日(金) 第七回関西定期演奏会(大阪)

十一月初旬、十二月中旬 第八次海外公演(東独、イタリア 他)(P.14)

十一月十二日(木) 第六十八回定期演奏会 青山タワー・ホール

一九八二年 一月二十九日(金) 第六十九回定期演奏会 青山タワー・ホール

二月 中部・関東地方公演

☆日本音楽集団は東京音楽大学民族音楽研究所の協力団体で、同大学の好意により
C-140三教室を練習場として使用しております。練習場の電話は、九八三—八
〇九六(直通)です。

坂田誠山尺八リサイタル——ソロとコンチェルトのタベ

序の曲/三木稔作曲 片足鳥居の映像/佐藤敏直作曲

飯俣のうた/長沢勝俊作曲 榎月調/流祖中尾都山

レクイエム・シャントイ/早川正昭作曲

特別出演/鳥原帆山(尺八)・井上一清(指揮) 賛助出演/花房はる

え(三絃)・木村玲子(二十絃箏)・広島アカデミー合奏団

七月二十七日(月)午後六時三〇分開演 エリザベト音大ホール(広島)

□入場料——一般二〇〇〇円 学生一五〇〇円 当日売二五〇〇円

□お問い合わせ 坂田方 〇三—四二〇—〇四八三

山本方 〇八二—二七二—三八六三

代表 長沢 勝俊

音楽監督 三木 稔

首席独奏者 野坂 恵子

常任指揮者 宮田耕八郎

運営委員長 坂田 誠山

事務局長 奈良 義寛

事務局 本岡 光子(経理)

会 計 監 査 霜島 素子(文芸)

マネージメント協力(国内及び国外)

株式会社ジャパン・アーツ

内藤 洋子(箏)

能沢 栄利子(箏)

澤田 美智子(箏)

松本 和美(箏)

尾崎 太一(打楽器)

藤谷 成敏(打楽器)*

堅田 啓輝(打楽器)*

高橋 明邦(打楽器・指揮)*

黒坂 昇(打楽器)

田村 拓男(指揮・打楽器)*

稲田 康(指揮)

研究団員

田嶋 恵美子(箏)

佐藤 里美(箏)

出口 裕子(箏)

水谷 雅康(尺八)

小林 恵美子(箏)

大島 菜穂子(箏)

安部 久恵(打楽器)

石崎 信宏(打楽器)

素川 欣也(尺八)

飯吉 規邦(尺八)

山本 哲子(三味線)

山田 まゆ美(琵琶)

飛山 百合子(箏)

岡田 寿子(箏)

川村 公子(箏)

内藤 久子(箏)

△作曲部▽

長沢 勝俊*

三木 稔*

宮川 正之

内田 とも子

△文芸部▽

中島 隆

名譽団員

協力団員

地方在住団員

休団中団員

杉浦 弘和(三味線)

伊藤 悠一(演技)

塚本 早苗(箏)

山田 美喜子(琵琶)

鶴野 和子

山田 美喜子(琵琶)

伊藤 悠一(演技)

塚本 早苗(箏)

山田 美喜子(琵琶)

鶴野 和子

山田 美喜子(琵琶)

伊藤 悠一(演技)

塚本 早苗(箏)

山田 美喜子(琵琶)

鶴野 和子

*印は本年度運営委員
昭和五十六年四月現在

△賛助会員▽

(有)琴光堂和楽器店(松本・諏訪・東京)

滝沢 修

野坂 操寿

鶴田 錦史

三木 卓雄

渡辺 精一

△団友▽

青木 誠

秋浜 悟史

荒谷 俊治

小田 切清光

川崎 祥悦

菊地 悦子

橋 知子

鞍掛 昭二

熊沼 広行

戸井 昌造

藤谷 昌悦

仲俣 申喜男

中村 八大

西川 浩平

野口 鎮

野口 美恵子

佐藤 敏直

芝 祐清

清水 義矩

荻沢 英雄

高野 文子

田中 利光

量平

鳳 晴出

星 旭

増田 睦実

元橋 康男

矢崎 明子

柳家 小三治

△維持会友▽

AOIミュージック株式会社

株式会社西友ストア

株式会社豊島園

株式会社ノサカ

西武建設株式会社

西武鉄道株式会社

西武百貨店

誠和音楽

日本オペラ協会

三菱商事株式会社

宮園自動車

宮園オート

宮園オート

宮園オート

宮園オート

宮園オート

宮園オート

宮園オート

宮園オート

日本音楽協会

協会世話人

長沢勝俊(代表)・三木穂・野坂恵子・宮田耕八朗・田村拓男・山田美喜子・坂井敏子・坂田誠山・田嶋直士・奈良義寛・芹沢英雄

構成団体

日本音楽集団

野坂恵子二十絃等エコー
ぐるーぶ・だだ
尺八ソリスト

関西音楽集団

「星組」合奏団(東京)

合奏団「たあく」(東京)

合奏団「鼎」(関西)

合奏団「遊」(仙台)

合奏団「ぐるーぶ・みずほ」(名古屋)

Nipponia Hawaii Ensemble(ハワイ)

*以上六団体は日本音楽協会合奏団を構成します。

協会支部

東京支部 日本音楽集団事務所扱い

関西支部 田嶋直士()

青柳 孝年 遠藤 将一 近藤 栄一 内藤 国枝 旗野 恵美 鶴 結
赤木 明 岡 昇三 國持 光生 永垣 玲子 早川 佐知子 松井 翠
朝吹 英一 金子 博美 高橋 克己 奈良 英雄 原 順一郎 松原 剛
井阪 勉 家根原光子 武江 利博 根志 彰 柳川 創造 柳田 正治
榎本 一 亀田 和保 田村 鎮男 新倉 鶴子 福田 洋一 吉岡 純子
榎本 容三 河野 義博 寺島 孝之 野坂 純一 星 光和 頼本美保子

水戸支部 斉藤幸山()
長野支部 佐藤幸子山()
山梨支部 郷見()
長崎支部 牧山雅楽郁()
熊本支部 古川羽衣山()
秋田支部 野口裕子()
邦楽の会つばら事務局()

日本の音、その磨きぬかれたひびき



コチウ

新発売

◇みさと尺八(山川直春)

細目、色白、オニギリ型管尻、コロガラない
標準価格 1.6、1.8尺 楓 19,500円
合竹 39,000円

◇みさと笛(ドレミ調正律管)七孔、八孔(山川直春)

標準価格 B⁺(六本調子)
楓 10,000円
合竹 15,000円

◇みやた尺八(七孔尺八専用)(宮田耕八朗)

標準価格 1.6、1.8尺
楓 19,500円
合竹 39,000円

◇琴風調しの笛

(ドレミ調正律管)六孔、七孔(石高琴風)
標準価格 B⁺(六本調子)
楓 10,000円
合竹 15,000円

銘木尺八



(株)ワダ楽器

※お求めは

有名アパート・和洋楽器店へお願いします。

〒939-18 富山県東砺波郡城端町信末451
TEL (07636) 2-2348・2-2221
●新製品につきましては、御迷惑のない様、製作に全力を傾けておりますが、お待たせいたしましたかならない時もありますので何卒ご了承下さい。

編集後記

ずいぶん長い間、狭い事務所の荷物の中に埋まり仕事をしていたが、このたび同じビルの一階に約四倍の広さの部屋が空き引越しました。このスペースがスタジオと、インフォメーション・センターを生みました。

■ 明るいオレンジ色のじゅうたんに、防音を施した白い壁のスタジオでは、本誌15ページにご案内したように、日本の楽器の音楽教室、ミニ・ミニ・コンサート会場、貸スタジオとして利用されています。そしてもう一つ、音楽会案内、レコード、楽譜などの出版物の販売等々……、その

他日本音楽全般にわたる情報センターとなることを目指して、日本音楽サービスが誕生しました。

■ 日本音楽の情報センターとなるには、皆さんが、何を知らたがり、どういう風にこの情報センターを利用したいと考えておられるか……、ということも大変参考になりますので、色々な問い合わせをお待ちしています。

■ 「邦楽現代」は、作者三木稔が作曲に専念中のため、今回は休ませていただきました。(霜島)

邦楽現代第十一号
定価四〇〇円
一九八一年五月一日発行
発行所 日本音楽集団
東京都渋谷区神宮前6-16-14
小早川ビル
電話〇三・四〇九・五三三・七四(代)
Nihon Ongaku Shudan (Pro Musica Nipponia)
Kohyokawa Bldg. 6-16-14 Jingumae,
Shibuya-ku, Tokyo
発行責任者 三木 稔
編集 霜島素子
印刷 株式会社アジア企画群
印字 けやき印刷
表紙デザイン 及部克人
レイアウト協力 黒沢恭子

「邦楽現代」取扱店—東京と東京近郊—
三越本店・高島屋玉川店、横浜店・東武
船橋店・浅草松屋・川崎コミヤ(以上、
武田屋楽器店扱い)・琴光堂 諏訪・松
本・琴光堂 金沢・関屋楽器 福井・伊
与楽器 奈良・中村楽器 京都・金善楽
器 岐阜・琴光堂 大阪・大阪屋
直接購読ご希望の方は日本音楽集団へお
申し込み下さい。尚、現在一六号は品
切れ、七号から九号は三〇〇円、十号以
降四〇〇円、送料は二冊まで二〇〇円、
四冊まで二五〇円。継続購読ご希望の方
は友の会B会員(詳しくは本誌21ページ
参照)になられるとお得です。

日本音楽集団のレコード (現在発売中のもののみ)

○現代物及び古典物

レコード・タイトル	収 録 曲 名 (作曲家)	レコード会社/番号	定価(円)
巨火・わ/三木稔選集vol.2	巨火・わ	カメフラート/CMT1041	2,500
野坂恵子・三木稔二十絃の世界	絃の曲・白濁・まぼろしの米・天知・佐保・竜田・事流詩集・ひなぶり他	カメフラート/CMT1015-8	10,000
録音によせて/長沢勝俊作品集	春二曲・尺八協奏曲・録音によせて・鳥獣によせる三つのパレード	RVC/JRZ 2537	2,200
めばえ/三木稔選集vol.1	ダンス・コ・サルタン・望生え・奔手・夕顔の詩・竜田の曲	カメフラート/CMT 1001	2,500
まゆだまのうた/長沢勝俊作品集	三絃協奏曲・笛と三味線のための音楽・二つの田園詩・まゆだまのうた	RVC/JRZ 2574	2,200
精華/長沢勝俊作品集	二つの舞曲・第四重奏曲・詩曲・南春	RVC/JRZ 2558	2,200
人形風土記/子供のための組曲	組曲「人形風土記」・子供のための組曲(長沢勝俊)	RVC/JRZ 2523	2,200
雅(みやび)/PCM録音による	華やぎ(三木稔)・六段の調・みだれ・新八千代獅子	COL/WX 7510	2,500
三木稔作品集Ⅰ〜Ⅲ	I—古代舞曲によるパワフル・凸・ヨーソスト・事流詩集・四段の曲・形象 Ⅱ—序の曲・雅びのうた・天知・孤筆	COL/CZ 7003-5	各2,000
野坂恵子古典音楽集 (第一集—第五集)	一集—千鳥の曲・八段・鈴他 二集—八重衣・五段他 三集—六段の調・春の曲・椿 四集—越後獅子・みだれ他 五集—青柳・屋嶋・林風の曲前奏	COL/CLS 5168, 5169, 5199, 5211, 5245	各2,000
書/和楽器による現代日本の音楽	組曲「人形風土記」(長沢勝俊)・しぐらみ第2(八村義夫)他	RVC/JRZ 2505-8	8,000

○解説物及び入門物

日本の楽器	日本の各楽器の代表的古典曲・他に現代曲の一部収録	RVC/JRZ 2520-1	4,400
日本の楽器入門	琴のなま・尺八のなま・三味線のなま・太鼓のなま	COL/ELS 3342-3	3,000
尺八の演奏法	尺八演奏法の基本練習他(宮田耕八郎編著)	VIC/SJL 62	2,200
琴と尺八(初級篇)	楽しい練習曲(1)(長沢勝俊編曲)	VIC/SJL 177	2,200
琴と尺八(中級篇)	楽しい練習曲(2)(長沢勝俊編曲)	VIC/SJL 178	2,200

○編曲物他

夢橋様/だだ	東芝/ETJ85011	2,500	尺八・虚無僧の世界	COL/WX 7506	2,500
等グリーン・スリーブス	VIC/KVX1078	2,500	「琴」ウィヴァルディ・四季	東芝/TA 60060	2,000
ピーターと狼	CBS 25AG 411	2,500	「琴」セバスチャン・バッハ	東芝/TA 72037	2,300
ラヴェル・ド・ビッシー/二十絃による	COL/WX 7510	2,500	「琴」モーツァルト	東芝/TA 72042	2,300
青柳亭/和洋音楽による日本のメロディ	VIC/SJL 99	2,200	I. スターン日本の調べ	CBS/25AS 42	2,500
組曲「七夕伝説」/だだ	東芝/ETP 72324	2,300	花祭り/形楽フォルクローレ	東芝/TA 72054	2,300
尺八ソリスティン・日本の情懷	COL/FZ 7087	2,000	尺八ニューサウンド・日本民謡集	COL/FW 7348-9	3,000

○その他にカセット・テープもあります。

最新
録音

現代センスを日本の伝統に生かした長沢勝俊の意欲作。

錦木によせて



春三題

若草/陽炎/花吹雪
沢井忠夫(三味線)、沢井一恵(箏)

尺八協奏曲

宮田耕八郎(尺八)
田村祐男(指揮)、日本音楽集団

錦木によせて(五つの小品)

藍玉/萌黄/青雲/珊瑚/琥珀
野坂恵子(二十絃箏)

飛驒によせる三つのバラード

歩荷/立閃/杉玉
坂田誠山(尺八)、砂時知子(箏 I)
吉村七重(箏 II)、花原はるえ(箏 III)
木村玲子(十七絃箏)

●JRZ-2577 ¥2,200

●好評発売中!!



現代邦楽の古典とも言える長沢勝俊の代表作。

人形風土記

組曲「人形風土記」
ニホボ/こけし/のろま人影/流しびな/きじうま/木うそ
子供のための組曲

日本音楽集団
●JRZ-2523 ¥2,200



さわやかな音色とともに春を告げる伝統楽器の響き。

萌春

詩曲(尺八独奏曲)/萌春(箏と尺八)/琴四重奏曲/二つの舞曲(合奏)

日本音楽集団
宮田耕八郎 ●尺八 坂田誠山 ●尺八
白根さゆ子、坂井とし子、野坂恵子、宮本幸子 ●箏
●JRZ-2558 ¥2,200



磨きぬかれた典雅な響き、長沢勝俊の個性豊かな力作。

まゆだまのうた

まゆだまのうた(尺八、箏による)/三味線独奏曲/二つの田園詩(尺八と箏、十七絃による)/風跡(笛と打楽器のための音楽)

日本音楽集団
望月太八 ●箏 宮田耕八郎、坂田誠山 ●尺八
杉本弘和 ●三味線 宮本幸子、野坂恵子 ●箏、笛
●JRZ-2574 ¥2,200

●尺八名曲名盤選



いま、鮮やかによみがえる伝統音楽!

鹿の遠音

尺八 古典名曲集成

鹿の遠音(尺八独奏) 雲外子(尺八) 下向山(尺八) 下向山(尺八) 二つの田園詩(尺八と箏、十七絃による) 風跡(笛と打楽器のための音楽)

●JRZ-2563-64 2枚1組 ¥4,400



山本邦山が初めて都山流の本曲を集成!

寒月

都山流尺八本曲名曲集成

流壇中(尺八) 詩曲(尺八) 湖上の月(尺八) 夕月(尺八) 木古(尺八) 紅葉(尺八) 朝風(尺八) 青海波(尺八)

●JRZ-2575-76 2枚1組 ¥4,400

邦楽器のファンに贈る日本のファンタジー!

長沢勝俊作品集

楽しい練習曲集

箏と尺八

(中級編)

長沢勝俊 作曲・編曲



●全音刊／48頁／700円

箏と尺八の二重奏や三重奏を楽しみながら、テクニクの上達をはかる目的で編みこまれた曲集です。この中級編では、技術的なレベル・アップをはかっていますが、それだけに、内容の充実したすぐれたアンサンブルをお楽しみいただけます。

第1部・編曲集

キラキラ星（モーツァルト）

赤とんぼ（山田耕筰）

砂山（山田耕筰）

メヌエット（バグナー）

出船（杉山長谷夫）

波浮の港（中山晋平）

トロイカ（ロシア民謡）

会津特産山（福島県民謡）

第2部・練習曲集

練習曲12番「ささ舟」（長沢勝俊）

練習曲13番「トンボの飛行」（長沢勝俊）

練習曲14番「かざぐるま」（長沢勝俊）

練習曲15番「とおひ春の口」（長沢勝俊）

練習曲16番「かあさんの子守唄」（長沢勝俊）

練習曲17番「まわり道」（長沢勝俊）

練習曲18番「鷹」（長沢勝俊）

練習曲19番「あこがれ」（長沢勝俊）

現代邦楽ライブラリー

番号	作曲者	作品名	定価
1	三木 悠	四重奏のための影象	¥ 500
2	三木 悠	箏・尺八・三味線	¥ 300
3	熊井 誠	【対話五題】二本の尺八のために	¥ 300
4	熊川敏彦	邦楽器のための【影象】	¥ 300
5	関家芳生	四面の箏のための音楽 三本の尺八のための音楽	¥ 650
6	小山清茂	和楽器のための四重奏曲第2番 和楽器のための三重奏曲	¥ 650
7	長沢勝俊	尺八・箏による【新春】	¥ 60
8	長沢勝俊	箏四重奏曲	¥ 600
9	清瀬保二	尺八三重奏曲	¥ 500
10	湯山 昭	三本の箏によるカプリース	¥ 650
11	三木 悠	独奏尺八のための【後響】 三本の尺八のための【ソネット】	¥ 500
12	関家芳生	尺八のためのプレリュード1・2	¥ 500
13	山本邦山	尺八作品集1	¥ 1000
14	佐藤敏彦	ディヴェルティメント	¥ 850
15	石粉真礼生	箏のための組曲	¥ 500
16	三木 悠	二十絃箏のための三つの作品 【天如】【佐保の曲】【竜田の曲】	¥ 800
17	広瀬重平	【アキ】二つの尺八のための 【鶴林】尺八独奏のための	¥ 700
18	清瀬保二	尺八と箏五重奏曲 日本楽器のための四重奏曲	¥ 800
19	藤田 貴	箏のための【たゆたい】	¥ 500
20	石粉真礼生	箏・尺八・三味線による【無依の味】	¥ 800
21	長沢勝俊	【詩曲】【まゆだまのうた】	¥ 500
22	三木 悠	【夕影の詩】【華草堂】【雅びのうた】	¥ 700
23	小山清茂	【赤土になる妹】【樹下の二人】	¥ 700
24	松村積三	【詩曲一巻】【詩曲二巻】	¥ 600
25	山本邦山	尺八作品集2	¥ 1500
26	清水 燭	邦楽作品集1	¥ 1500
27	山本邦山	尺八作品集3	¥ 1500
28	長沢勝俊	【二つの田園詩】	¥ 500
29	野田雄行	四重奏曲第1番	¥ 1000
30	佐藤敏彦	【片足鳥居の映像】【鳩のいる風景】 【灰色のデッサン】	¥ 1000
31	藤田 貴	【永遠A】【永遠B】	¥ 800
32	清水 燭	邦楽作品集2	¥ 1800

東京都新宿区東五軒町25番162

全音楽譜出版社

☎東京 (03) 267-4321(出版部)